仮想世界の探偵『助手』

潤々

【注意事項】

　このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
　小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、濃霧の八十稲葉から世界を救ったとある探偵と。
その探偵に付き従う助手と。
その周りにいる人たちによる日常（じけん）を綴った日記（じけんぼ）である。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
この作品は『ＳＡＯシリーズにペルソナ４のキャラクターを、オリキャラ付きで入れてみた』というものになっています。
☆ＳＡＯシリーズはフェアリィ・ダンス編から始まります
☆ペルソナ４本編はアニメを数話とＳＳとＰＩＸＩＶの知識しかありません。それ以外の原作はＰ４Ｄ、Ｐ４Ｕ、Ｐ４Ｕ２のみやっています。
☆キャラクターの口調がおかしい部分があります。
☆誤字、脱字があるかもしれません。
　☆ペルソナ４関連の時系列はＰ４Ｇ、Ｕ、Ｕ２、Ｄが全て完結した冬からです。なので、ペルソナ４メンバーは年齢、学年が一つ上になっています
　これらが大丈夫で、時間があればお付き合いください。

目　次

事の始まり～もしくは探偵とＶＲＭＭＯ～ ―― 1
桐ケ谷和人～もしくは浮遊城の英雄～ ―― 6
ダイシー・カフェ～もしくはわずかな情報源～ ―― 13
妖精郷～もしくはアルヴヘイムでの旅立ち～ ―― 19
領主対談～もしくは襲撃～ ―― 24
対決～もしくは観戦～ ―― 29
戦後対談～もしくは新たな仲間～ ―― 34
再出発～もしくは突発的解散～ ―― 39
聞き込み～もしくはお見舞い次いでの容体確認～ ―― 43
探偵の帰還～そして協力者～ ―― 49
再起、調査～そして確定～ ―― 54
旧友～もしくは作戦会議～ ―― 59
挑戦～もしくは心強い応援～ ―― 63
空中都市、否研究施設～もしくは探偵の考察二連発～ ―― 69
マヨナカオンライン～～もしくは抑え込んだもの～～ ―― 76
男の正体～～もしくは新たな相棒～～ ―― 81
浮遊城の主～もしくは時知らぬ子供～ ―― 87
病院前にて～もしくは、最後の戦い～ ―― 93
幸せな終わり～もしくは新たな始まり～１ ―― 98
幸せな終わり～もしくは新たな始まり～２ ―― 103
ＨａｐｐｙＥｎｄ～ａｎｄＮｅｗＧａｍｅ～ ―― 108

事の始まり～もしくは探偵とＶＲＭＭＯ～

さて、
前書きと同じ始まりかたをするのはどうかと思うが、これほどわかりやすい導入もないので多用させてもらおう。

さて、
事の始まりはとある依頼からだった。依頼主は総合電子機器メーカー〈レクト〉の代表取締役、結城彰三氏。
内容は娘、結城明日菜さんの意識不明の理由を探ること。正確には、ソードアート・オンラインによる昏睡状態から彼女が帰還しない訳を探ることである。

ソードアート・オンライン
ＶＲＭＭＯ、仮想現実型大規模多人数オンラインゲームの金字塔となるべく作られたゲームであり、世紀の大天才茅場明彦氏が作り上げた『ゲームオーバー＝現実の死』という狂気のゲーム。
使用者の意識をゲームの中に取り込む家庭用ＶＲゲーム機『ナーヴギア』を凶器、もしくは錠として使用された、意識の集団監禁事件は二年前に勃発し、つい最近ゲームに囚われた者が生還した。テレビでも報道されている一般的な話題だ。だがしかし、実際には三百人の人間がいまだ意識不明という謎を残していたことを知る人は、この時点では少ない。
そして、どうやら白鐘探偵の探偵の新しいお仕事は、その謎に向かっていく事であるようだった。

一つの車が師走の東京を走る。グレーのレディースーツにダークブルーのネクタイを合わせた女性を助手席に乗せた車は、とある総合病院にたどり着いた。駐車場に車を停めると、二人の男性が歩いて来るのが見える。一人はブラウンのスーツに身を包んだその出で立

ちはいかにもやり手の経営者といった感じを見せている。彼が今回の依頼主である結城彰三氏。その後ろから来たもう一人は、ダークグレーのスーツと眼鏡の奥の人好きのする笑顔が印象的だった。
「よく来てくれました。改めて、私が依頼した結城彰三です。」
「白鐘直斗です」隣にいた少女・・・直斗さんが返す「こっちは助手の彩君」
「灰原彩です、よろしく。」彼女の紹介に合わせて挨拶をする。
「よろしくお願いします。」互いに挨拶を交わすと、彰三氏は隣の眼鏡の男を紹介した「こちらは、私の部下である須郷くん。」
「須郷です。よろしくお願いします。」眼鏡の男・・・須郷氏はそういうと、一歩下がって彰三氏を促した。
病院の前で簡単な挨拶をした後、中に入り、昏睡状態の結城明日菜さんが入院している病室に向かう。
病院のロビーは病院というよりむしろホテルのようで、ただの庶民には衝撃しか生まれなかった。
受付から通行証を受け取り、病室に向かう間にも、まだその衝撃は頭から抜けていなかった。原因の中にいるのだから当たり前なのかもしれないが。
「ここ、病院ですよね？」
思わず隣にいた直斗さんに小声で質問する。
「ここは民間企業によって運営されている高度医療機関です」
隣を歩いている直斗さんも驚いたような顔でーーーおそらく他の人にはわからないようなほどの驚き顔だがーーー同じく小声で返してきた。
「公営のものとは様々な違いがあるでしょう。・・・さすがにここまでとは思いませんでしたが。」
直斗さんは事前に情報を集めて来ていたのか、この病院についてもある程度教えてくれたが、正直覚えきれていないので割愛する。むしろ直斗さんが急な依頼だったというのにそこまでの情報を集めていたとこに驚いた。
そんな会話をしながら彰三氏の後をついていくと突き当りの病室

の前で立ち止まり、ネームプレートについたスリットに通行証を通すとドアが一切の音を立てずに開いた。
「こちらです。」彰三氏が俺たちを中へ促しながら入る
　彰三氏に続いて入った病室には、一人の少年が立っていた。黒のジャケットを来た中性的な顔の細身の少年、それっぽく整えたら女の子のようにも見えるだろう。
　そして、彼の姿越しに見えるベットで横たわる人物がいた。キレイな栗色の髪を長く伸ばし、遠目からも端正な顔立ちをしているのがわかる。容姿端麗とはまさにこのことなのだろう。だがしかし、ここ2年は使われていないかのように細くなった体、その頭にかぶさる黒いヘルメット型の機械『ナーヴギア』がその美しさを台無しにしていた。
　このベットで寝ている人物が肝心の結城明日菜さんで、少年は彼女を見舞いに来ていたらしい。
「・・・と、桐ケ谷君。今日も来てくれてたのか。」
「こんにちは、結城さん。お邪魔してます。」
「かまわんよ、この子も喜ぶ」
「失礼、彰三さん。この子は？」
　どうやら少女が喜ぶ関係の少年について、直斗さんが質問する。質問のために前に出た直斗さんにつきそう様に前に出る途中。結城さんの後ろにいた信之氏が、妙な目線ーーまるで嘗め回すようなーーを明日菜さんと少年に向けていたのが見えた。
「あぁ、白鐘さん、彼は桐ケ谷和人君、あのＳＡＯの英雄キリト君だ。」
「ちょ、結城さん!?」
「あぁ、菊岡さんのいっていた少年ってアンタか」
「えっ・・・！あなたたちはいったい・・・！」
　その言葉に驚いたような表情をした少年ーーー和人君かーーーは素早く警戒し始める。と同時に脛を直斗さんに思いっきり蹴られた。どうやら余計な事を言い過ぎたようだ。直人さんあなたの蹴り痛いです。
「彼女たちは白鐘探偵事務所の探偵さんだよ。」
「始めまして、白鐘探偵事務所の白鐘直斗です。」

「助手の灰原彩。よろしく。」
「あぁ・・・。よろしく。」
「彼女たちはＳＡＯ事件の時も警察に協力していたんだ。」
　彰三さんが俺たちとあの事件との関係を簡単に説明してくれる。その間桐ケ谷君はずっと驚いていた。
　無理もないだろう、警察もご厄介になるあの『白鐘』の探偵がこんな１７の少女で、ましてやその少女がかの事件を解決しようとかかわっていたと聞いたらそんな反応もする。
「僕たちもできることはほとんどありませんでした、せいぜい総務省の人と協力してすべてのユーザーに病院を手配させる事しか・・・」
　だが、この少女は、あの事件についてとても悔やんでいる。先に言っておくと、彼女は東京だけでなく全国にいたＳＡＯユーザー１万人をその日のうちにすべて特定し、病院に収容、完全介護体制を整えた。その手配を、政府によって対策チームが作られる前におこなってる。対策チームが彼女に頭を下げるしかないことを行っている。しかし、彼女はそのあと何もできずに二年を過ごしたことが残念でないらしい。

　この白鐘直斗という人間は、責任感がとても強い、去年半年かけた事件で少しは丸くなったが、一人で形をつけようとする癖は消えていない。責任感が低いよりは良いのだろうが。

「彰三さん、そろそろ依頼の詳しい内容について聞かせてください。どうやらそちらの子のことらしいですが。」
「ああ、すまない、君たちには明日菜が帰ってこないことについて調べてほしい、というのは前にも言ったね。」
　話を変えるように彰三さんから詳しい話を聞こうとすると、二人の人物から声がかけられた。
「そのことなんですが社長ーーー」
「あ、あんたたちはーーー」
　が、同じタイミングで話かけてきたために二人とも声を止めてし

まった。直斗さんが仕方がないとでもいうようにため息をつくと、こちらに声をかけた。
「すいませんが彩君、桐ケ谷くんから話を聞いてきてもらっていいですか。正直、年下と話すのは慣れていないので。」
「わかりました、お偉いさんと話すのは苦手なんで、助かります。」
周囲の人物に呆れ顔やら不安顔やらにさせながら和人君に顔を向けると、和人君も察したように頷き、「じゃあ、また」と明日菜さんに声をかけてから俺と一緒に廊下へ出た。

桐ケ谷和人～もしくは浮遊城の英雄～

先ほども言ったが明日菜さんの病室は突き当り手前にあり、ちょうどその突き当りのところにベンチがあったのでそこで話を聞くことにした。

「和人君は直斗さんに何か用があったのか？」

そう切り出すと、和人君も視線をこちらに向けながら言う。

「あんたたちは・・・」といった後、少し考えるように声を詰まらせてから。「あなたたちはアスナを助けるために動いてるのか？・・・ですか？」と言い直し交じりに聞いた。どうやら敬語を使う事には慣れていないようだ。

「言いづらいなら敬語使わなくていいよ。そうだな。直斗さんは明日菜さんの昏睡状態について調べてる。詳しいことは言えないけどね。」

と和人君は少し考えるように口に軽い握りこぶしをあてうつむく。

ちょっといいかい、と声をかけて和人君の興味を引くと、つづけてこう言った

「和人君は明日菜さんとはどんな関係だったんだ？」

「あ、ああ。アスナとは・・・恋人、だった。ＳＡＯの中では結婚もしてた」

「ほう、結婚」

言っている間に和人君の顔が赤くなってきている。直斗さんがさらっと見抜いていたが、彼はおそらく年齢的には１５，６、自分の色恋沙汰（その手のこと）を話すのには抵抗があるのだろう。結婚という単語が気にもなったが、そこはゲームの話、何か方法があったのだろう。

「ＳＡＯに結婚システムってのがあって、それを使ってたんだ。」

「なるほど、和人君から見た明日菜さんの印象は？」

そう問いかけると和人君は少し考え込んだ後、続けた、どうやら最初に明日菜さんを助ける事が目的なのを伝えたからか、彼には信用されているようだ。

「アスナの印象か・・・強い人、かな。」
「強い人？」
「あぁ、攻略組のリーダーで〝閃光〟って呼ばれてたくらいだ、ボス戦の作戦を練ったり前線の指揮をしたりもしていた。一回勝負したこともあるけど、攻撃が目に見えないくらいのスピードで迫って来た。」
「なるほど、〝閃光〟のごとき攻撃速度って事か。」
　ソードアートオンラインの被害者で、一番多かった年齢層が十代後半なことを考えると、あだ名が厨二チックなのは仕方ないだろうか。しかし、新たにわからない単語が出てきた、せっかく英雄（ハイプレイヤー）が目の前にいるのだ、すべて教えてもらおう。
「攻略組というのは、ＳＡＯ内での一種のチームのようなもの？」
「チームというよりグループかな。ＳＡＯの脱出条件については茅場が外にも公表してるって言っていたけど・・・」
「『ナーヴギアの分解・コードの切断等による強制脱出はできない、行った場合プレイヤーは死亡する』『ゲーム内での死亡した場合も同等、プレイヤーも死亡する』『脱出するには全百層のステージをすべて攻略し、最終ボスを撃破することのみ』ってやつだね？」
　そう、これがソードアートオンラインを狂気のゲームたらしめていたルール、ナーヴギアそのものを凶器にしたシステムによって生き残れなかった４０００人以上の使用者を電子レンジよろしく脳死させた悪魔のルールだ。ナーヴギアそのものに組み込まれた正常な機構の一部だったがゆえに現実（こちら）からは一切対処できなかった。
「ああ、俺もアスナもゲームを攻略して自力で脱出することを選んだんだ。他にも俺たちをサポートする人たちや、安全エリア・・・敵が来ない所で過ごすことを選んだ人、安全マージンを大きくとれる場所で狩りをして過ごす人もいた。」
　〝マージン〟は英語の余裕、限界の意味を持つ単語、とすれば〝安全マージン〟は安全に戦える余裕のあるという意味であることだろう。
「なるほど、ゲーム攻略を中心にすることを選んだ組（グループ）で攻略組か。で、彼女はそこのリーダー。・・・ってことは彼女が自分の

意思で仮想世界に残っていることはあり得ないって事か。」
　仮想世界から出るために行動している少女が、仮想世界に残ろうとすることは矛盾している。
「あり得ない、そもそも茅場はＳＡＯからの全員ログアウトを確認して、ゲームそのものをデリートしてる。残り続けるのは不可能だ。」
「ふむ・・・ん？なんで茅場明彦がゲームをデリートしたのを知ってるんだ？」
　茅場明彦があそこにいて、デリートを生き残った者に伝えたのか？・・・いや、ログアウトという言葉の意味がゲームからの帰還（本来の意味通り）であるならば、そもそも茅場が消去したことそのものが和人君が起きた後の話のはず。絶対に消去したという確信は持てないはずだ。
「・・・俺がラスボス、茅場明彦を倒したことは聞いてるよな？」
　ソードアートオンラインのラスボス、最終関門が茅場明彦本人だという事に内心驚きながら頷くと、和人君は話を続ける。
「俺が茅場を倒したってはなっているけど、正確には相討ちだったんだ。あの時はヒースクリフ・・・茅場と俺はお互いに剣を相手に突き刺して、同時にライフがゼロになった。そのあと何があったかわからないけど、ヒースクリフは俺のナーヴギアが脳を破壊する前に、俺たちを現実に返したんだ。その時に、ソードアートオンラインのすべてのデータを消去するって、自分で言ってたよ。なんだかんだ、約束は守るヤツだったからな。」
　ヒースクリフというのは、茅場明彦のゲーム内の名前、つまりはキャラネームだろう。茅場明彦がソードアートオンラインを削除したことはわかったが、それによってさらにわからないことが増えてしまった
「俺たち？和人君のほかにも誰かいたのか？」
「アスナもいっしょにいた、俺よりも先に死んだはずなのに・・・」
　・・・彼女の脳に障害が残ってないか心配になってきた。心臓は動いてるし、脳死していないことは確認してだろうけど。
「なんで茅場明彦は和人君と明日菜さんを生かしたんだ？」

「わからない、あいつは話をしたかったって言ってたけど・・・」
「彩君！」
　疑問を解消しようとしていた所で向こうの話を終えた直斗さんが声をかけてきた、残りの二人はどうやら帰ったのかそこにはいなかった
「こちらは終わりました」
「あ、じゃあ終わりにしましょうか、時間取らせてゴメンネ。」
「いや、ありがとうございました。あの、アスナのこと、よろしくお願いします。」
　和人君は直斗さんと軽く挨拶し、そう言い残して帰っていった、直斗さんはそれを見送りながら同じく見送っていた俺に声をかけた
「それで、話を聞けましたか。」
「彼と明日菜さんの関係、それとソードアートオンライン内での明日菜さんについて、後ソードアートオンラインの現状、ついでに茅場明彦についてってとこですね。・・・そういえば明日菜さんのキャラクターネーム聞いてなかったな。」
　和人君から聞いた話を全て教えると、直斗さんは窓の外を眺めながら、不意に口を開いた
「彼は、茅場さんのことを『ヒースクリフ』と呼んでいたんですよね？」
「はい、最初は訂正してたんですけど、途中から普通にヒースクリフ呼びでした」
「なるほど・・・そうなると、」
「おそらく彼女のキャラクターネームは『アスナ』、彼女の本名でしょう。」
　どうやら唐突だが、名探偵白鐘直斗の推理ショーが始まったようだ。
「・・・なんでそう思ったんですか。」
「結城彰三さんによると、明日菜さんは本来ソードアートオンラインはおろか、ゲームそのものに興味がなかったそうです。あのゲームに巻き込まれたのも、彼女の兄の出張中に、ナーブギアごと借りて遊ん

だため。つまり、彼女はゲーム初心者という事になります」
「・・・そうなりますね」
「彩君、前に行ってましたよね。『ゲーム初心者はキャラクターの名前に自分の名前を付けることが多い』って。」
「確かに言いましたね、でも明日菜さんがそうだとはわからないんじゃ」
「彼は茅場さんのことを『ヒースクリフ』と呼んでいた、彩君が言っていたことです。それに対して自分の・・・こ・・・恋人である明日菜さんのことを向こうの、呼び慣れている方で呼んでいないんです。」
「・・・恋人の部分でどもるのどうにかしましょうよ、顔赤いですよ。」
「黙ってください。・・・二年間の内どれほどの時間を過ごしたのかは分かりませんが、システム上とは言え、・・・け、結婚まで行った相手の名前がそうそう抜けるものでもないはずです」

「なるほど、それで明日菜さんのキャラクターネームが本名であると考えたんですね。彼の中ではキャラクターネームの方のアスナさんだったと。珍しく、証拠も何もない推測だけですね。」

「・・・頭のいい助手を持って幸運ですよ、僕は」
「そりゃどーも・・・最後まで言えなかったくらいでむくれないでくださいよ、子供ですか貴女。」
　納得しながらーーーもしくは彼女の頭の回転速度と初心さに感嘆しながらーーー頬を膨らませてすねる探偵から目線を外し窓の外に視線を移すと、そこに二人の人影が見えた。斜め上からだが、その後ろ姿には覚えがあった。
「あれ。」
「・・・彩君?どうしました?」
「あそこにいるの、和人君と信之氏ですよね?」
　そう、そこにいるのは黒いコートとダークブラウンのスーツの二人組、先ほど見た桐ケ谷和人君と須郷信之氏に違いなかった。どうやら須郷氏が和人君に顔を近づけ、何かを話しているようだ。

「やはり、そうなのでしょうか・・・」
「やはり、とは？」
「先ほど須郷さんが結城さんに声をかけたのは、僕たちへの依頼を取りやめてほしかったからだそうです」
「依頼の取りやめ？なんでまたそんなことを。」
　直斗さんが受けた依頼は『明日菜さんの昏睡状態の原因究明、可能なら対処』。それを取りやめてほしいという事は。彼は彼女に起きてほしくないという事になるのだが・・・。
「詳しい経緯は教えてくれませんでしたが、しかし、彼との会話で大体の利用は察せました。彼は、明日菜さんの婚約者という立ち位置で彼女の家に、結城家に取り入るつもりなんです。」
「婚約者？それがこの依頼に関係あるんですか？」
「明日菜さん本人がこの婚約に反対していたそうです。しかし、その明日菜さんが現在昏睡状態。この場合、法的には須郷さんが結城家の養子に入る形になります。それでも、彼が結城家の一員になることに代わりはありません。・・・ここに来る前に調べたのですが、結城家は由緒正しい名家で、多くの分野にその影響力を持っています。」
「その影響力を欲しがった・・・って事ですかね？」
「今考えられることは、という前提になりますけどね。」
　結城家に取り入ることにかなりのメリットがあることは分かった。だが、それが彼の目的なのかどうかはわからない。
　結局、須郷氏が彼女の婚約者となるーーーつまり彼女と結婚するーーーために彼女が昏睡状態である事が重要だった、という事だけが分かったようにしか思えなかった。
　やはり彼女のような頭の回転速度など持つことはできない。彼女の立ち位置には彼女しか立つことはできない。なら、元の立ち位置に立つしかないのだろう。

　つまり、彼女の助手としての立ち位置に。

「さて、それじゃあそろそろ帰りましょうか。車もありますし、どっか

寄って行きますか？」
「そうですね・・・そういえば、彩君が良くいくカフェにソードアートオンラインの生還者がいると言っていましたよね。腹ごしらえのついでに情報を集めましょう。推測しか出来ない程度では足りません」
「仕事熱心ですね。」
「当然です、受けた依頼は完遂させます、白鐘の名に懸けて。」
「分かりました、それじゃあ行きつけの、〝ダイシー・カフェ〟に行きますか。」
次の行き先を決めながら、直斗さんと共に車へとその足を進めた。

ダイシー・カフェ～もしくはわずかな情報源～

ダイシー・カフェ。

さいころをモチーフにした看板を掲げた裏通りの喫茶店は、店主には悪いが閑散とした雰囲気がお気に入りで、結構な頻度で利用している。

ＳＡＯ生還者の店主曰く、『夜は稼げる』らしい。

ドアを開けるとカランコロンという鐘の音と共にカウンターの向こうにいる店主が出迎えた

「いらっしゃい、兄ちゃん。」

「こんにちは、ミルズさん。『いつもの』二人分でお願いします」

ドアを開けると、カランという鈴の音と共にスキンヘッドの黒人マスター。アンドリュー・ギルバート・ミルズさんが挨拶をしてきたのでそのまま注文する。常連客特有の会話の後ろで、後ろにいた直斗さんが関心したような声を漏らした。

「ずいぶんと寂れた雰囲気がありますが・・・なるほど、君が好きなのも頷けます」

「後ろの嬢ちゃんは随分と毒舌だな・・・」

直斗さんの歯に布着せぬ物言いにミルズさんはあきれていた。この探偵は常識があるんだか無いんだか・・・。

そのまま直斗さんがカウンター席に座ったのを見て、俺も隣に座る。

「それで、件の彼は・・・もしかしてマスターが？」

「その話は食べながらでいいでしょう。おいしいですよ、ここのフレンチトースト。」

「・・・そうですね、そうしましょう。」

「なんだ、俺になんか用か？」

直斗さんのＫＹ発言に対応しながら料理を待っていると、厨房と思われる場所から料理とカップを二人分持ってきたミルズさんがやってきた。

俺がダイシー・カフェに来るといつも頼む『いつもの』とはフレン

チトーストとオリジナルブレンドのコーヒーのセットである。
それを並べると、ミルズさんはカウンター越しに俺たちへと向かう。他の客はいいのかと一瞬考えたがそもそも他の客がいなかった。
直斗さんも他の客がいないことを確認してから、ミルズさんに話し出した。
「すいません、あなたに、少々お聞きしたいことがありまして。」
「俺についてか、いったいなんだ？」
「ソードアート・オンラインの中で〝閃光〟と呼ばれたプレイヤーについて何か知らないでしょうか。」
「・・・なんでそれを知っているんだ？」
直斗さんが質問した瞬間、ミルズさんの声のトーンが下がった。周囲の気温さえ下げてしまうような目は、実践を経験した兵士を思わせた。
しかし、直斗さんは彼の質問に、とても冷静に答えた
「僕はとある筋から、ＳＡＯ事件、そして未帰還者の謎を追っています。」
「ってことは、お前さんはあいつらを助けるために行動してんだな？」
「そのとおりです」
直斗さんの真摯な言葉と態度に、ミルズさんは信用したのか、かの〝閃光〟について話し始めた。
「〝閃光〟。ＳＡＯでその二つ名を持ってたのは、アスナちゃんしかいねぇ。」
「ご存じなのですか？」
「向こうじゃ結構な有名人だったからな。」
直斗さんがミルズさんへ質問を繰り返すのを見ながらフレンチトーストを口に運ぶ。とりあえず得られた情報から和人くんの情報には嘘がないことを確認できた。
情報のすり合わせを終え、お礼を言う直人さんにミルズさんは少々考え込んでから言った
「・・・こっちでも少し調べてたんだ」
いいながらしゃがみこむと、おそらくバーカウンターについた戸棚

から何かを取り出し机に上げた。
　平たい長方体に、背中から羽の生えた少年と少女が連れだって空を飛ぶ絵が描かれたそれは、とても見覚えのある物だった。
「『アルヴヘイム・オンライン』？」
「知ってるのか。そう、アルヴヘイム・オンライン、通称ＡＬＯだ」
　思わず声に出た声にミルズさんが答える。
　それに答えるようにまた声を上げる
「知ってるも何も・・・これやってますもん」
　ＡＬＯは今人気のＶＲＭＭＯだ。１年前に『今度こそ安心!!』と発売されたナーヴギアの後継機〈アミュスフィア〉をハードとして作られたこのゲームは、その特徴的なシステムによって人気を博している。
「名前だけは聞いたことがあります」
　という直人さんにーーーおそらく今回の依頼について情報を調べるうちに見つけたのだろうーーー俺とミルズさんで解説をする。
「妖精達の住む世界で、その妖精の一人になっていろんなことをしようってＶＲＭＭＯです」
「レベル無しの完全スキル性、プレイヤースキル重視・・・プレイヤー自身の反射神経とかが直接反映されるっつう玄人向きのシステムでありながら、〝飛べる〟って特徴で大人気なんだ」
「飛べる・・・ですか？」
　説明の中で彼女が興味を持ったのはその単語だった。彼女は続ける。
「確か、仮想空間内で行うことができる動きは、人間のできる動きの延長でしかないはずでは？」
「妖精だから羽があるってんで、フライトエンジンってのを搭載して空を飛べるようにしたんだと」ミルズさんが言ったその言葉に、直人さんが呆れた顔をする。
「フライトエンジン・・・もはやなんでもありですね」
　話の流れが完全に世間話になってきていたからか、直人さんがコホンと咳払いをした後、話を切り出し直した

「話を戻しましょう。そのアルヴヘイム・オンラインが、明日菜さんに関係するものなんですか？」
「おっと、そうだった。その話だな」
　ミルズさんがおどけたような態度で言うと、すぐにまじめな顔で、一つの紙をポケットからだして言った
「こいつを見てくれ」
　それは、一つの写真だった。おそらくＡＬＯの中で写真撮影用のアイテムを利用して撮られたものだろう。雲を突き抜けた先で枝葉を付ける大樹という現実ではありえないもの、ゲーム内で『世界樹』と呼ばれているものをおさめた写真だった。
「世界樹の枝葉・・・あれ、ＡＬＯでここまで飛べませんよね？」
「ここまで飛べない・・・飛行に制限があるんですか？」
　言葉の中で直斗さんがそう疑問を呈し、それにミルズさんが答える。
「そうだ、ＡＬＯには飛行可能時間に制限がある。そして、フィールドのちょうど真ん中にある世界樹ってもんには、どれだけ頑張っても葉っぱの先にすら届かない。・・・だが、バカなことを考えるやつってのはどの世界にもいるもんでな。５人くらいで体格順に肩車して、ロケットみたいに飛んでったヤツらがいたのさ。」
「あぁ、ありましたねそんな話、最初聞いたとき大笑いしましたよ。」
　聞いた事のあった話を思い出し、笑いを抑えながら言った。
「・・・バカ軍団ですか」
　と直斗さんもあきれるように言う。全くである。
「っと、そんな話じゃねえ、この辺りを見てくれ。」
　言いながらミルズさんが指で描いた丸の真ん中には、枝に吊り下げられた鳥籠が映っていた。
「鳥籠？何でこんなところに。あのロケット法のあとで枝葉の大きく下、雲の上に少し行ったとこで進行禁止エリアになって、この辺りはユーザーに見えないところのはず。メモリの無駄ですよ。」
「なるほど・・・見せるつもりの無い位置に置かれた籠、ですか」
　ゲーム製作の事情を交えた俺の説明を受けて、直人さんが考え込

む。
「兄ちゃん結構知ってんだな・・・この鳥籠の中、ちょっとよく見てくれ」
ミルズさんが呆れるように言いながら　その鳥かごを指さす。
その鳥籠の中には、妖精がいた。
キレイな栗色の髪を長く伸ばした妖精のシルエットは、先ほど見た令嬢・・・結城明日菜のように見える。
「これは・・・」
直斗さんもそう見えたのだろう。その額には汗がにじんでいた。
「オレにはこれがアスナちゃんにしか見えない。」ミルズさんは真剣な顔で言った。
「オレが手に入れたのはこれだけだ。嬢ちゃん、俺からもなんか出す。アスナちゃんを助けてやってくれ。」
「・・・最初に」直斗さんも真剣な顔で返した。
「あなたから何かをもらう事は出来ません。それは報酬の二重取りになります。・・・ですが、僕には依頼を完遂させる使命があります。必ず、彼女を助け出して見せます。」
ダイシィ・カフェを出てからの彼女の行動は早かった。車に乗るなり、鞄からタブレットを取り出し、
「僕の分のアミュスフィアを用意しましょう。それと、先ほどのゲームも」
そういう先輩の指示に従い、タブレットに記録していた病院に向けて車を走らせる。
「先輩のって・・・自分で行くんですか。」
車を運転しながら直斗さんに聞くと、当然というように返してきた。
「僕の受けた依頼ですから。もちろん、彩君も協力してください。向こうについてはわからないことだらけなので。」
「真面目ですねぇ・・・わかりました。情報収集のあとでゲームショッ

プに行きましょう。専門店なら安く買えます。」
赤信号に止めた車内で、続けて言う。
「仲間も連れてきますよ。」
その言葉に、直人さんは顔をしかめた。
「彩君・・・これは仮にも〝仕事〟です。部外者を入れるわけにはいきません。遊びじゃないんですよ。」
「いや、直人さんもよく知ってる人ですし、口も堅いですよ?オレも、ＡＬＯで超強いってわけじゃないので、人がいた方が楽です。」
「それでもです。部外者に手伝わせるのは・・・
僕の知っている人?」
「あ、はい。仕事でやったときにハマってしまったらしいですよ・・・
久慈川りせさん。」

妖精郷～もしくはアルヴヘイムでの旅立ち～

――ＡＬＯ　ケットシー領　フリーリア前――

「それで？私が呼ばれたってことは、ＯＫ出たってことだよね？」

「そゆこと、ってかここまで先輩さっき言ってたけど？」

「まぁね、いちおうってことで。」

次の日、俺はＡＬＯにて一人の女性と名探偵を待っていた。

女性、鮮やかな銀色の髪を長く伸ばし、紅色の瞳をしていた。背中には自身の得物である長槍ーーー石突に布のリボンがつけられているーーーを背負い、最低限のプレストアーマーを着込む彼女の名前ーーーキャラクターネームーーーは『ヒミコ』。リアルで先輩と親友関係にある少女だ。彼女に協力をしてもらうかどうかで、あの探偵がどれほど悩んだかは想像に難くない。彼女本人は二つ返事だったそうだが。

ＡＬＯ内での彼女の種族はプーカ。音楽に秀でた妖精であり、唯一歌を演奏することで戦闘支援が可能な種族である。彼女は歌を利用した援護に特化している。

ちなみにこちらは『ツクモ』という名前のレプラカーンとして活動している。レプラカーンは、素材の運搬や金装飾など、鍛冶や細工に関する能力に優れる鍛冶妖精だ。その性質上筋力が高めに設定されており、より重たい物や多くのものが持てる様、筋力値ーーこのＶＲゲームにおけるプレイヤーの筋肉量に相当するーーが高くなっている。その筋力値を利用した高重量の武器を振るい戦うスタイルだ。

そして俺たちの目の前にある街、【フリーリア】は、敏捷と、〈テイミング〉といわれるモンスターを仲間にするスキルを得意とする猫妖精、ケットシーの領地である。

本来なら領地アドバンテージーーー特定種族の領地では、その種族はほかの種族からダメージを受けないし、ペナルティ無しでダメージを与えられる仕様のこと。正式名称は知らないが俺が適当に名前を付けた。――ーの関係でそこまで近づきたくはない場所だ。

そんなところに何故俺たちがいるかというと、ＡＬＯ初心者の直人

先輩が現在フリーリアでチュートリアルをしているからに他ならない。
「ホントにケットシーで始めるとはね・・・夏の時を思い出すなぁ。」
「夏というと・・・愛ｍｅｅｔｓ絆フェスティバル？」
「あ、そっか、ツクモはあの時いなかったっけ、あれ。あの時、最初に衣装合わせやったんだけどさ、花村先輩がオオカミ男のコスプレし始めて、それに先輩がドラキュラでのっかっちゃって、そのままコスプレ大会になったの。その時に私が便乗して直斗くんｎ「何の話をしているんですか！」おっと、お疲れ『スクナ』」
　そんな話をしていると、フリーリアから一人の女性がやってきた。よほど恥ずかしかったのか頬を赤らめていはいるが、それでも白さのわかる肌。青に近い黒色のショートヘアとそこから生えた耳と切れ長の目が黒猫を思わせ、ダークブルーを基調にしたスーツのような服を着込んでいた。
　彼女こそが『スクナ』。何を隠そうわれらが白鐘直斗探偵である。
「お疲れじゃないですよ全く・・・」
「まあまあ。ネコミミ似合ってますよ、スクナさん。・・・ところで右腕のそれは何です？ハープ？」
「ハープだったら私の専売特許だけど・・・」
　スクナさんの右腕に付いたなにかに目を向ける。それを一言でいうなら、極小のハープ、だろうか。某シーカー族の少年の持っている片手で扱えるハープが小さくなってガントレットに付いていた。
「あぁ、これですか？どちらかというとリラの方が近いと思いますが、これはですね・・・」
　スクナさんは上機嫌にそういい、左手で右のガントレットをいじると、ガションという音とともにハープが変形した。手や腕で支える部分が左右に大きく開き、折りたたまれていた弦がピンと張られ、右腕を台座とするクロスボウに変化した。
「ギミック式のクロスボウです。ちょうど、遠距離への攻撃手段も欲しかったので助かりました。」
「そういうの好きだもんね。メイン武器は腰の直剣？」

「え、先輩近距離ですか、なんかそんなイメージないですけど。」
「僕だって扱ったことはないです。ですが、先ほどくじｋ・・・ヒミコさんに聞いてみたところ、どうやら敵を崩す役がいないとのことでしたので。」
「なるほど・・・っていうかいつの間に聞いてたんですか」
「さっきメールが来てね。」
　確かにチュートリアル前にフレンド登録したけど、さっそく使ってたのか。
「そういえば先輩、随意飛行はできますか？」
「先ほど、親切な方に教えていただきました。コツをつかめば簡単ですね。」
「にゃはは、ずいぶん仲がいいんだネ～三人トモ？」
　三人で話していると唐突に声をかけられた。振り返るとそこに、茶色の髪を持つ褐色肌のケットシーがいた。周囲には６人程のケットシーが、彼女を守るように立っている。
「そんな仲良し３人組に、ちょっとお願いがあるんだけど、いいかナ？」
「・・・ケットシーのハイプレイヤー６人も引き連れて」彼女の言葉に最初に反応したのは、ヒミコだった。「どんなお願いをしようっての？ケットシー領領主、アリシャさん。」
　その言葉でやっと、彼女がケットシーのリーダー。アリシャ・ルーだと理解した。確か、領主システム導入後ーーつまりこのゲームが始まってすぐーーから一度も領主を変更したことのないという伝説を持つ人物だ。
「普段、自室でぐうたらしてるって噂の猫姫さんか、確かに何の用だ？」
「今から蝶の谷に向かうんだけど、ちょっと一役代われてくれないカナ？」
　彼女のお願いは、要するに護衛だという。
　曰く、これからシルフとの領主対談があるとのこと。
　曰く、シルフ領主より護衛を三人連れていくと連絡が来たとのこ

と。
　曰く、ナメられたくないからこちらも三人護衛を連れていきたいが、これる人がいない。
　曰く、そこにいたのが俺たち三人組だった、とのこと。
「・・・護衛ってか、数合わせじゃん。」
　ヒミコが言うのももっともである。
「そうともいうネ！・・・お願い！ワタシを助けると思ってサ！」
「あぁ・・・どうします？先輩。」
「・・・蝶の谷はどこにあるんですか？」
　俺の問いかけに、珍しく疑問で返す直斗さん・・・スクナさんにさらに説明する。
「蝶の谷はケットシー領からまっすぐ東で・・・向こうですね。」
「アルンへ行く道の一つだね。ここから世界樹の根本に行くなら一番手っ取り早いよ」
　フリーリアの反対方向を指さす俺に続けるようにｋ・・・ヒミコが言うと、探偵は普段より近い位置にある頭を頷かせてから、言った。
「ちょうどアルンへ行くところでしたし、僕たちで務まるのなら。」
「ダイジョーブダイジョーブ！いざとなったら全力で逃げていいカラ！」
　と黒猫の手を取ってブンブンと振る茶色猫は、思い出したかのように唐突にストレージを開くと、その中から布のような物を取り出した。
　・・・はたから見ると、急に手を放し指を動かしたかと思うと、急に発生した淡い光に包まれて布のような物が現れた。これが前述の行動だとわかるのは、俺を含むこのゲーム内のプレイヤーすべてがゲーム内で日常的に行っていることだからという事が大きい。
　閑話休題
　とにかく布ーーーよくよく見るとそれは全身をすっぽりと覆い隠すローブーーーを取り出したアリシャは、それを二人分手渡した。
「ハイコレ、着といてネ」
「え、ちょ、アリシャさん何これ？」

「・・・フード付きローブ・・・。おまけにコレは・・・ネコミミですか？」
「ダイセーカイ！ソレはネコミミフード付きローブダヨ！ソレつけとけばケットシー以外を連れてきててもバレないでショ」
「いや、飛んだら羽根の違いでバレるわよ。」
「そこは・・・ほら・・・ガンバって？」
　あまりにも杜撰かつ見切り発車な隠蔽工作に唖然とし、ヒミコが小声で「あったなー・・・。深夜枠でこんな感じの意味の分からない無茶ぶり企画・・・」とつぶやき遠い目をしていた頃、スクナさんはお付きの1人と話をしていた。
「あなたたちも大変ですね・・・」
「いや、まぁ・・・慣れました」
　その見張りの顔は、心なしかやつれているように見えた。

領主対談～もしくは襲撃～

ッそこ！ツクモ君、お願いします！」
スクナさんが直剣でのけぞらせた敵に向かって、手に持ったソレを振り上げる。
「ｓａｙ・・・ラァ！」
ソレとは斧。
敵を倒すために作られ、突くことさえ想定された戦斧槍。
掛け声とともに振り下ろされたハルバードは、蝶の谷を飛ぶ怪鳥の体を両断し、ポリゴンのかけらへと変換させた。
「いやァ、すごいネ・・・二人トモ。」周囲に護衛を連れたケットシーが呆れたようにいう「キミ、ホントにニュービー？」
「少なくとも、この手のゲームはやったことはありませんよ。今回が初めてです。」直斗・・・否、スクナさんは剣を鞘に収めながら続けた「まぁ、この武器に関しては、近くに上手い人がいたことがありますからね。」
「あぁ先輩かー」ヒミコは納得がいったといわんばかりに頷いた「先輩は剣強かったからね。」
「・・・剣道家の人？」アリシャは逆にあまり納得がいっていないように首をかしげた「にしてハ、動きが荒々しいとイウカ・・・時々首狙ってたヨネ？」
「アリシャさん。」彼女たちの前に出て壁になりながら言う「リアルの詮索はルール違反・・・だよな？」
「アー・・・それもそうだネ！」苦笑した猫姫はスクナさんたちの前に躍り出ながらーーー置いてかれた一団を慌てさせながらーーー言った「そろそろ対談の場所に着くヨ？レッツゴー！」
「・・・ありがとうございます。」アリシャの後をーー正確には追いかけた護衛の後をーー追いながらスクナさんが言った。俺もそれに追従しながら答える。
「いえいえ・・・あの猫姫、結構強いですね。スクナさん結構スピードが出てたのに目で追ってましたよ。」

「そうなんですか?」スクナさんは意外だったのか俺に問いかける。
「そうじゃなきゃ時々首狙ってたなんて言わないでしょう」俺の答えに対し、スクナさんは少し黙ってから再び話し出した。
「あぁ・・・いえ、そこではなく・・・僕がスピードを出していた、というところです。」
「あぁ、そっちか・・・」
スクナさんの本当の問いかけーーー彼女のスピードについてーーーについて、後ろのヒミコも交えて話し出す。
「少なくとも俺には出せないスピードでしたよ。」
「ＶＲＭＭＯって本人のイメージで動くから、あれくらいのスピードが出せるって思ってるってことだよね。」
「・・・まぁ、ステップや歩法を駆使すれば出せるスピードでしたからね。」
なるほど。
確かにこの人はリアルでも結構速い。いや、素早いといったほうが言いか。探偵として培われた観察力で機先を制し先制するのが得意・・・とはここにいるヒミコの言である。まぁ、探偵には荒事がつきものとか言ってカバンに護身武器を入れて片田舎に向かう人なのでリアルで戦えても別に疑問も持たないのだが。
「イメージで動く、ということは。現実で動かせないような動きもできるのですか?」
「そうですね、風にだってなれますよ。」
「ＶＲＭＭＯでの運動速度は、本人の反射神経と、アミュスフィアでの総プレイ時間の長さで決まるって話もあるね・・・っとそろそろ見たい!」
話し込んでいるうちに対談予定の場所に着いたようだ。ケットシー勢の後方で二人と共にゆっくりと着地し、後ろから合流する。こうすればフードをかぶっている限り初見ではーーその手のスキルを持っていない限りーーケットシーではないと見破られることはないだろ。
対談場所にはすでに緑色を中心にする一団・・・シルフの外交団が

いた。正面に立つのは、ダークグリーンの長い髪を背中に垂らし、紙のように白い肌を持つ美形のシルフ、シルフ領主のサクヤだ。緑色の和装に身を包むその姿は大和撫子の言葉を思い出させるが、大太刀を手に敵を切り裂く様は烈火のごときと呼び声高い。
「待っていたぞ、アリシャ。」
「ゴメンネー！用事が終わんなくてサ！」
　簡単な挨拶ーーーずいぶんとフランクだったがーーーを終えて、領主達は簡易的に作られた席に座り同盟について会話を始めた。シルフ内、サクヤを含む七人が座り、三人が立っている。おそらく立っている三人が、急遽連絡された護衛なのだろう。彼らに倣ってこちらも立ったまま周囲を警戒する。ごまかしは領主ドノに任せよう。
　同盟の内容は、グランドクエスト【世界樹】の共同クリアについてのもの。詳しい話は興味がなかったので警戒しながら聞き流していると、隣に来たスクナさんが話しかけてきた。
「ツクモ君、この後の予定を確認しておきましょう。アルンに移動したあと、世界樹について聞き込みと確認を行います。」
「グランドクエストについてはいいんですか？」
「大丈夫、そのあたりはすでに確認済みです。実際にここにいる人たちから話を聞いておきたいんです。あらかた聞き終わったら、例の写真が撮れた位置を確認します。見えないようになっているとの話ですが、念のため。」
「聞き込みのあとに、調査ですね。わかりました。」
「そこまでいったら、今日は終わりです。一度現実に戻って、情報の洗い出しを行います。」
「二人とも、何の話してるの？」
　会話にヒミコさんが入ったことで、そちらに説明を始めたスクナさんから距離を取り二人のカバーをしていると。二人の領主が握手を交わしているのを横目に見た、どうやら対談は成功したらしい。
　そのまま警戒を続けていると、ヒミコが急に声を荒げた。
「みんな！編隊を組んだプレイヤーがやってきてる！」
　注目した全員の視線が驚愕に染まる。すぐに行動したのはサクヤ

だった。
「【索敵】スキルか！方角は?!」言いながらストレージから自身の獲物である大太刀を装備する。
【索敵】スキルは、ＡＬＯ内で技能を表す〈スキル〉の一つ。周囲のキャラクターの位置を把握できる技能である。ヒミコはこれを常時発動しておくことで敵の接近に気づけるようにしていたのである。
「南東方向！アルン高原を直進してきてる！」ヒミコも槍を取り出し、スクナさんもそれに続く。
　ストレージからハルバードを取り出し、二人の近くによると、茶色のケットシーーアリシャさんーーが尋ねた。
「南東方向・・・てことはサラマンダー？」アリシャさんも得物のクローを装備し、お付きもそれぞれ武器を持つ。
「・・・可能性は高いな。」サクヤが苦虫をかみつぶしたような顔で答えた。「この対談で一番被害を被るのは、自分の有利を崩されるサラマンダーだ。」
「この対談を知っている人物は？」スクナさんが尋ねた。「サラマンダーにコレが漏れるようなことはあるんですか？」
「スクナちょっとタイム！」ヒミコが声を荒げる！「調査の前に構えて！すぐに来るよ！」
　いうが早いか、空に赤い点の集団ーー間違いなく『赤』を基調とする戦闘妖精、サラマンダーの一団ーーが現れる。
　と、同時にキラキラと光る点・・・火の玉が大量に飛んできた。
「魔法攻撃！」誰かがそう言う前に、羽を震わせて急上昇する。
（この距離で届くなら十中八九遠距離魔法。）急上昇の間にやるべきことを思考する。
（対談場所に向けて放たれた地点攻撃、当たればいいから誘導なし、威力重視の直線、着弾時に広範囲にダメージを飛ばすもの。火属性の魔法でそれに該当するのは、爆撃弾魔法一種類のみ。被害を抑えるには・・・

　　空中で着弾させる）

空中で大きく羽を広げて急停止すると、飛んでくる火の玉ーー爆撃弾ーーを受け止めた。
近くのものは身に着けた鎧で、遠くに飛ぶものは両手に持ったハルバードで、一個づつーー誘爆により想定より多くの魔法弾を捌いていたそうだがーー着弾させて防いでいく。
受けるダメージは【自動回復】スキルで回復する。魔法防御はそれなりにあるはずだから問題ない。
鎧の大体が吹き飛び、ハルバードの耐久値が一桁になったころ、続いていた爆発が止み、サラマンダーの軍団が突撃態勢に入る。持っていた武器を投げ捨て、新しいものをストレージから取り出した時、
空から黒い何かが落ち、
「総員、剣を引け！」
大きな声ーーなんてものじゃ終わらない強烈な叫びーーをあげた。

対決～もしくは観戦～

「指揮官に話がある！」
　青年が叫びながらサラマンダーの一団に向かっていくのを、一度下がりながら観察する。黒い髪に黒いコート、低くはないその体をすっぽり隠してしまうような巨大な剣を背負っている。
　そこまで観察したところで、ケットシーの陣営に戻り・・・背中から仲間二人分のパンチを食らった。
「ったぁ!?何ですか二人とも？」
「何ですかじゃないですよ。何突撃してるんですか。」
「もう！食らいすぎて体力すっからかんじゃん！早く回復して!!」
「あぁ・・・はい、わかりました。」
　とパーティメンバー二人から押し付けられた回復ポーションを飲んでいると。アリシャ、サクヤの二名と、先ほどまでは見てない人物が近づくのが見えた。
「三人の事情は聴いたよ」サクヤが話す「すまなかったな、こちらのわがままで迷惑をかけてしまって。」
　どうやらアリシャがサクヤにこちらの事情を話したようだ。道理で、ケットシーではないとわかったはずなのに騒がれなかった。
「せんｐ・・・スクナさんが許したんですよね？それならいいですよ」
　謝罪を手早く終わらせてもらうと、彼女たちの後ろーー正確には、サクヤの後ろに近いーーにいる人物に目を向けた。
　シルフアバターに多い金髪を長く伸ばし、蝶を模した飾りでポニーテールにしている、凛々しい眼が特徴的な少女だった。緑を基調とした服に軽装の鎧を重ね、直剣を腰に差した姿から、スピード型の剣士であることがわかる。
「あ、えっと、あの・・・」その人ーー少女とした方がいいかもしれないーーは、見られていることを感じたのか慌てた後、一つ深呼吸して、自己紹介を始めた
「初めまして、リーファといいます、よろしくお願いします。」
「スクナです」えらく他人行儀な挨拶にすぐに返したのは彼女だった

「言いづらいのなら、敬語なしでもいいですよ。僕はこれが地ですけど。・・・それで、彼はいったい・・・？」
「今聞き耳を使ってみたんだけど」ヒミコが質問に答えた。「あの子、ウンディーネとスプリガンの同盟の大使だって。」
　彼女の言う『聞き耳』とは、スキルの一つ【聞き耳】のことである。キャラクターの聴覚を強化したり、壁ごしに話を盗み聞きしたりーーこのゲームでは、壁の向こうの声が聞こえるのは、熟練の【聞き耳】スキル持ちだけであるーーいろいろと悪さできるスキルだ。
　ウンディーネは水に関することが得意な妖精、スプリガンは遺跡やダンジョンの探索を得意とする妖精だ。この二つは確かに領地が隣で、同盟を組んでいたと言われててもおかしくはない。飛行速度はスプリガンの方が高いため、大使として選ばれるのもおかしくはない
「サクヤさん、ウンディーネとスプリガンは、同盟を組んでいたんですか？」
「いや、そんな話は上がって来ていないぞ。」
　そもそも同盟を組んでいれば、ではあるが。
「この対談に向けて急ごしらえで同盟を組んだ・・・そんな簡単に組めるものなのでしょうか・・・」
「スクナくん、考えるの後！あの二人、戦うみたいだよ！」
　ヒミコの声に全員が顔をあげる。そこには先ほどの大剣のスプリガン、そして同じく大剣を持つサラマンダーが距離を取って構えていた。
　そのたたずまいは、どちらも異様であった。スプリガンはその背の大剣を片手で構えている、スプリガンではありえない筋力値である。対するサラマンダーは、たった一人、暗く赤く輝く刀を手に、全ての兵を下がらせていた。大群の戦術としてはまず悪手である。
「まずいな・・・」その武器を見たサクヤが言う「あのサラマンダーの武器、レジェンダリィの紹介サイトにあった。非実体化のエクストラ効果を持つ両手剣《魔剣グラム》だ。あれを持っているということは、彼が『ユージーン』将軍で間違いないだろう。」
「〝武の弟〟ユージーン。」サクヤの解説に補足を入れる。「サラマン

ダー最強、つまりはこのＡＬＯ最強のプレイヤーですね。純粋戦闘力は領主の『モーティマー』を越してるって噂です。」
「非実体化、ですか？」だが、スクナが気にしたのは、その武器の性能だったようだ。
「正式名《エセリアルシフト》」アリシャが言った「剣も盾もすり抜けて、受けさせてすら貰えないんだヨ」
　言い終わるの待ってたかのようなタイミングでーーもちろん、偶然ではあるがーー二人の妖精が激突した。
　先に振りおろしたのはユージーン。最強を名高い彼の攻撃は、強烈な鋭さを持って遅いかかる。それを少年が剣の腹で防ごうとしたとき。
　ユージーンの剣が、少年の剣をすり抜けた。
「防御力貫通・・・ですかね」と、探偵がつぶやくと
「どちらかというとガード無視だな。」と答えたのはサクヤだった。
「盾を構えてもあの通りだ。」
「確かに強力だけど、玄人向きの武器ですよ。下手したら相手の体を無視するんですから。」
「逆に言えば」ヒミコが言う「さっきからいちども非実体化のタイミングを間違えないあたり、ほんとに強いね。」
「『キリト』くん、大丈夫かな」
　リーファのその呟きを、スクナさんは聞き逃していなかった
「キリト？彼はキリトという名前なんですか？」
「あ、うん・・・キャラクターネームも『Ｋｉｒｉｔｏ』だし・・・」
「どうしたのスクナ？」
「いえ・・・なんでもありません。」
　ヒミコからの問いかけをはぐらかすと、探偵はあごに手を当て黙り込んでしまった。彼女が何か考えているときのしぐさだと知らない人にその説明をーー主にヒミコがーーしていると、周囲を黒い霧が覆っていった。
「これは、【幻惑魔法】！さっきのスプリガンのものか!?」最初に反応したのはサクヤだった。

【幻惑魔法】は、このゲームに存在する魔法の一種であり、文字通り幻覚を見せて周囲を惑わすものだ。基本的には目くらましにしか使うことが出来ず、それゆえこれを得意とするスプリガンの不人気さに拍車をかけてしまっている。

「なめるな！」掛けられた側の男が叫んだ「時間稼ぎのつもりか！」

叫びのあと、すぐさま詠唱が響く。【ディスペル】・・・それぞれの属性に一つはある魔法無効化の魔法が放たれ、火属性特有の赤い光によって煙幕がはがされる。

しかし、そこに彼はいなかった。

逃げた・・・？という誰かが発した呟きが聞こえるほどの静寂を切り裂いたのは、

「・・・上か！」

ほかでもないユージーンだった。

その声につられるように見上げると、確かに黒い影が突撃を行っていた。しかし、その手に持つものが変わっている。いや、変わっているというよりも、増えているといった府が正しいか。その右手には、先ほどまで持っていた、身の丈ほどはある大剣。そして左手に、細見の直剣が新たに握られていた。

そのあと少年の攻撃は華麗の一言だった。ユージーンの魔剣の【エセリアルシフト】を、片方の剣を透過させ、実体に戻した瞬間にもう片方の剣で弾くという達人芸で防ぎ、両手で別々の剣を緻密に操作し、振り回されることなく切りつけ続ける。その華麗にして苛烈な剣戟に、ユージーンの攻撃は全てつぶされていた。

「ぬ、おおおおおお！」超近接状態での不利を悟ったか、ユージーンが咆哮と共に炎の衝撃波を放つ。それは少年をわずかに押し戻し、互いに突撃の姿勢を取らせた。

「決まるネ！」言ったのはアリシャだった。「ここが正念場ってヤツだヨ！」

「いっけぇぇぇぇぇぇ！キリトくん！」

リーファの健気な応援を背に受けた青年ーーキリトは、大上段から振り下ろされるユージーンの剣を、その体を通させまいと長刀ではじ

き出し。大剣をサラマンダーの体につきこんだ。
「決まった。」その声は誰の声だったか。
追撃に叩き込まれたキリトの垂直四連撃が、ユージーンの体力を削り切り、赤く輝く灯火へと変貌させた。

戦後対談～もしくは新たな仲間～

歓声が上がる。
素晴らしい戦いに、そしてそれに打ち勝ったスプリガンの青年に、シルフ、ケットシー、そしてサラマンダーからも拍手が送られた。
歓声の中央にいた青年は、どーもどーもと一礼すると、こちらに向かって言った。
「誰か、蘇生魔法頼む。」
「分かった。」
答えたのはサクヤだった。【蘇生魔法】、キャラクターが死亡状態ーーゲーム内用語ではリメインライトというーーの時に使用し、即座のリカバリーを行う魔法。オンラインゲームにおいてはーーかのデスゲームでもない限りーー定番となっている魔法である。
サクヤによって使われた蘇生魔法によって、ユージーンが復活し、交渉の続きが行われた。
「・・・見事な腕だ、貴様は俺が見た中で最強のプレイヤーだな。」
「そりゃ、どうも」
「貴様のような男がスプリガンにいるとはな・・・」
先ほどのような一触即発のような空気ではないが、ユージーンはまだ、彼のことを信じられないようなーー実力は認めるが、スプリガン・ウンディーネ同盟そのものが耳に入っていないからだろうーー目線を送っていると、サラマンダーの部隊から一人ーー武器から見てランス使いーーが来て、言った
「ジンさん、ちょっといいか」
「カゲムネか、どうした」
そのサラマンダー・・・カゲムネが言ったことをまとめると、こうなる
・彼のパーティを全滅させたスプリガンこそ、彼ーーキリトである。
・その際にはウンディーネの連れがいた
・〝エス〟が追わせていた人物もキリトである。
三つ目の〝エス〟が何を示しているのかはわからなかったが、ユー

ジーンはソレを聞くと、納得したかのように頷きながら言った。
「そうか・・・そういうことにしておこう。
ここでウンディーネとスプリガンに対立する考えは俺にも領主にもない、この場は引こうーーだが、貴様とはもう一度戦うぞ。」
「望むところだ!」
そういったキリトの突き出す右拳に自分の拳を突き当てると、ユージーンはスクナさんの方を向いて言う。
「貴様ともだ、そこのレプラコーン」
「先輩はケットシーですよ。」
「いや、ツクモ君のことでしょう。」
「ここにレプラカーンは君しかいないから。」
訂正したらほかの二人に突っ込まれた、なぜだ。
ユージーンも呆れている、解せぬ。
ユージーンがサラマンダーの一団を引き揚げさせると、キリトがリーファに話掛けた。
「サラマンダーにも話が分かるヤツがいるじゃないか。」
「・・・キリトくんってホントに無茶苦茶だよね。」
「よく言われるよ。」
「話の途中すまないが、」二人の会話を遮ったのは、シルフの領主だった
「状況を説明してくれないか。」

「お疲れさん。ナイスガッツだったぜ」
キリトが状況を説明している間、護衛に入っていたシルフが声をかけてきた。ブロンズカラーの短髪と、首から下に纏ったニンジャ衣装が特徴的な青年だ。腰の後ろにナイフーーどちらかというと苦無だろうかーーが二本収められている
「俺は『ジライヤ』だ、よろしく。」
「ツクモです、よろしく。」伸ばされた手をつかみながら言うと。彼が納得したような顔で頷いた「・・・何かありますか?」
「いや、あいつもすみに置けねえなって思っただけだ。」

「炭?」
「いや、ちげぇってかぜったい分k「何を言っているんですか、『花村』先輩」ちょっおま・・・!」
　彼ーージライヤの話を遮るようにスクナさんが入ってくると、ジライヤは目にも止まらない速さでーー比喩表現ではなく、本当に目で追えなかったーースクナさんの前まで行き、何やらひそひそと話し出した。
　・・・詳しい話は聞き取れなかったが、わずかに聞こえた「タブー」や「ごまかせない」等の会話から、どうやら先ほどの花村発言についてのようだ。どうやらジライヤのリアルネームを口走っていたらしい。しばらくそうしていると。後ろーー領主やキリト達がいた方ーーから声がかけられた。
「スクナー!さっき言ってたの分かったよー!」
「ヒミコさん、さっき言ってたのとは・・・サラマンダーに情報が漏れる可能性ですか。」
「そう、シグルドって人がサラマンダー側のスパイだったんだってさ。」
「シグルドってシルフ領の重役じゃね?そんな人がスパイだったのか。」
「あ、はい・・・そうですけど・・・あなたは・・・?」
　そこまで言ってようやく、ヒミコはジライヤを認識したようだ。彼は一瞬微妙な顔ーー呆れたような、落ち込んだようなーー顔をすると、すぐに笑顔で自己紹介を始めた。
「ジライヤだ、よろしくな。」
「あ、はい、ヒミコです・・・ん?ジライヤ?」ヒミコは彼の名前を聞いて首を傾げたと思えば。両手で口元を隠すように驚いた。
「え、もしかしてルサンチマン先輩!?」
「ルサンチマン先輩ってなんだよ!」ヒミコのあんまりなあだ名ーールサンチマンは強者への嫉妬を意味する言葉だーーに突っ込むジライヤ、明らかな友人の雰囲気を見て、あの片田舎に住んでいる直斗さんの仲間だと頭の中で確定させる。口調的にヘッドフォンをつけて

いた彼だろうか。
「それで?何かあったのか?えっと・・・スクナか、スクナがこういうのやるの珍しいな。」
　話題をそらすようにジライヤが言った。確かにスクナさん・・直斗さんはこの手のゲームをあまりやらない。やるのはやる必要がある時だ。
「ちょっとした情報収集です、これから中央の方へ行こうかと。」
「そういうことか。深くは聞かないでおくぜ。」
「助かります。」
　わずかな会話でこちらの事情をいくつか察したのか、そんな会話をしている二人を眺めていると。遠くから、声をかけられた。かけられた方向を見ると、さっきまで注目を集めてたスプリガンとさっきまで横にいたシルフが一緒になって歩いてきた。
「此処にいたのか、さっきは助かったぜ」
「いえ、こちらもありがとうございました。」スプリガンが話しかけて来たため、受け流しつつ直斗さんを促す。
「スクナです、こちらはヒミコさん、それとツクモ君です、あなたがあと少し遅ければ、彼がやられていました。」
「あれ、俺は?」
　彼女の紹介にすっ飛ばされたジライヤが声をあげると、探偵はあ、っといわんばかりの顔をした。どうやらほんとに忘れていたようだ。
「おいっ!・・・全く・・・ジライヤだ。よろしく。」
「あんたも、苦労してるんだな・・・。」
　スプリガンは自ら名乗ったジライヤに同情すると、気を取り直すように話始めた。
「キリトだ、あんたたちも世界樹を目指してるのか?」
「そうですね」こちら側から会話のーーもしくは交渉ーーの席に上がったのはスクナさんだった。「あんたたちも、ということは、あなた達もですか。」
「あぁ、そこで提案なんだが、俺たちと一緒に行かないか?途中までで

も」
キリトの提案は、簡単に言えば共闘だった。確かに目的地が同じ以上、一緒に行った方がいいだろう、道中の敵を倒す時間が早くなる。弾いて倒すを繰り返す戦いを行うこちらは、他に二人入れても柔軟に対応できる。
・・・倒すべき敵が道中にいれば、だが。
このアルン近郊ともいえる区域には敵が出ることがない。そのために領主対談の地として選ばれるほどだ、そのため、この提案には利が薄い。それぞれの秘密ーー向こうは知らないが、直斗さんからしたら、依頼のことになるーーが漏れてしまう可能性の方が高いだろう。選ぶのは先輩だが、はたして。
「・・・アルンに入るまで、」スクナさんが口を開く「加えて、お互いの目的に干渉しない、の条件付きで、どうですか」
どうやらスクナさんは、デメリットを軽減しつつ、共に行く選択をしたようだ。
「あぁ、いいぜ。」
キリトはスクナさんの提案に二つ返事で返すと、彼女と握手を交わした。

再出発～もしくは突発的解散～

「それなら、俺も一緒に行って良いか？」
ジライヤが自分を指さしながら言った。「俺もアルンに用があるんだ。」
「良いですよ、同じ条件でなら。」
「おう。」
わずかな会話の後に、新たに三人を加えてアルンへと飛び立つ・・・前に、キリトの周りを小さな光が飛び回り始めた。
「パパ、浮気はだめですって言いましたよね・・・」
「ちょっユイ、出てきたｒ「「「パパ？」」」・・あ～・・・」
飛び回り始めた小さな光ーーよく見れば、それは人の形をしていたーーは、キリトの顔の前で止まると、キリトと会話を始め、そこで出てきた言葉にヒミコ、スクナ、ジライヤの三人と声をそろえた。花をモチーフにしたようなワンピースと二対四枚の羽根を持つ、長い髪の小さな妖精が、頬を膨らませていた。
キリトは、少女について説明をし始めた。
曰く、自分は初回購入組だが、最近まで別のゲームをしていた。
曰く、彼女はその際に配布されたナビゲーションピクシー・・・つまり、助言用のキャラクターである。
曰く、彼女はその中でも特別製である。
事情を説明したキリトは素早く話を切り替えて空へと飛び立った。
「・・・それにしても」キリトを追いながら探偵がひとりごちる「彼のナビゲーションピクシーだけが特別な仕様であることなんてあり得るのでしょうか。」
「絶対何かあるよな・・・」探偵の独り言をとらえたのは、ジライヤだった「実は運営側の人間とか？」
「いやぁ、ないんじゃない？」ヒミコも会話に入る「それでグランドクエストクリアしたら出来レースじゃん。」
「一度出来レースを行う、という可能性もあります。」探偵は考察する。
「そうすることでクリアできることを証明するのかもしれません。」

「そうだとしたら、どうするんですか？もしそうなら迂闊に話できませんよ。」
　今直斗さんがやっていることは、『ＡＬＯがＳＡＯ帰還者の意識昏睡と関係があるのかの調査』と言い換えることが出来る。つまり、ＡＬＯに何かしらの問題があると決めつけているようなものなのだ。ソレを運営の人間が放置するとは考えにくい。
「・・・アルンに着けば別れます」問いかけに探偵は答える「今はたどり着くことを考えましょう。到着後、改めて作戦会議を行います。時間にも限りがありますし。」
「私は時間大丈夫・・・」そこまで行ったところで、ヒミコの顔が曇った「じゃないや、午後から撮影があるんだった。」
「やはり、ですか。」スクナはいつもと変わらない声で言った。どうやらあらかじめ考えていたことらしい「どうしますか？ここでログアウトしますか？」
「いや、大丈夫！」ヒミコは返した「明日はお昼まで寝れるから、アルンまでは一緒に行くよ！」
「無理はしないでくださいよ」スクナはそういうと、先行するスプリガンとシルフのの後を追っていった。
「みんな！」キリトがこちらに聞こえるよう叫んだ「あっちに村がある！一旦休憩しよう！」
「分かりました！」スクナが大声をあげる。
「あれ？」しかし、それにヒミコが、首を傾げた。「アルンの周りに村なんてあったっけ」
　その声に合わせて、マップーー要するに世界地図、ただしズームや町の検索が可能ーーを使い周辺を調べると、奇妙なことが起こっていた。
「・・・ん？」ソレに疑問を抱いて数秒、ソレが意味することにすぐに気付き、叫んだ。「先輩！あの町・・・
　マップに表示がない！町じゃない何かです！」

その叫びに反応したのかーーもしくはすでに入っていたキリトとリーファを標的としたのかーー町の地面を食い破るように巨大な口が現れた。
その口は町――後から考えれば、あれは疑似餌のようなものだったのだろうーーごと二人を食い破り、そのまま地面から本体が現れた。
ワーム。牙を持った巨大なミミズと言えばいいのだろうか。ソレは口ーー胴体と口しかないがーーをこちらに向けた。
「戦闘準備！」探偵の言葉に弾かれたように武器を持つ「二人のことは後です！まずは危険の排除を！」
「おっけ！」「おう！」「分かりました！」
ヒミコ、ジライヤに続くようにワームを倒さんと駆け出した。
考える疾風、ジライヤの戦闘はそう感じさせるものだった
両手に一本ずつ持たれた苦無ーー短剣カテゴリの『コウガナイフ』という武器らしいーーを器用に扱い、連続でダメージを与え、即座に距離を取り反撃を食らわず避けきる。そうやってヘイトを集めて、他が攻撃を行いやすくする。他のプレイヤーに目標が変われば、一気に距離を詰め切って連撃を叩き込む。仲間の位置や、敵の頭の向き等を常に把握し、どう動けばいいかを常に考えて動く、手練れの戦闘だった。
しかもそのすべての行動が速い、スクナさんの移動速度を超えた、まさに風というべき高速移動で、その全てを行っている。
ジライヤとスクナ、二人のスピードに翻弄されたワームは、
「ツクモくん！」（さん）！」
振り下ろされたハルバードを躱せずに、ポリゴンまで粉砕された。
「・・・さて」粉砕を見届けてからジライヤが尋ねる「どうする？あの二人いなくなっちまったけど。」
「仕方ありません」探偵は答えた「二人には悪いですが、このまま行きましょう。」
探偵の提案に否を言う者はおらず、アルンへの道ーー空路ーーを進み始める。
「あれってどうなるんだろ」空を飛んでいる間に、ヒミコが誰ともいわ

ずに尋ねた「さっきのワーム、飲み込まれたら即ゲームオーバー？」
「・・・どうやら、別空間に飛ばされるらしいですよ。」答えたのは探偵だった、ＡＬＯに何かしらのヒントがあると知ったのち、具体的には車に乗ってから、タブレットを用いて情報を集めていたらしい「ニブルヘイム、でしたか。地下の極寒世界のようですね。」
「・・・魔神型の巣窟ですね。ハイプレイヤーでも攻略に人数を必要とするエリアです。全域ダンジョンみたいなもんなんで・・・まあ、実質ゲームオーバーですね。」
「うーあー」先輩に続けて言った内容に、ヒミコは言葉を失ったようだ。
「すぎちまったことは仕方ねぇさ」ジライヤが笑顔でーー無理をした、という言葉が前につくがーー言った「もうすぐアルンだ。行こうぜ」
　言いながら加速するニンジャに追いつくように、二人と共に速度を上げた。

聞き込み～もしくはお見舞い次いでの容体確認～

「ほいっとうちゃーく。」
「それじゃあ私落ちるね、お疲れ様！」
アルンに到着するや否やヒミコさんはその身をひるがえし雑踏へ消えていった。特に何かあるわけでもなく、このゲームからログアウトしに移動しただけである。
「さて」ヒミコのログアウトを確認した探偵は話し出す「はｎ・・・ジライヤ先輩は行かないんですか？」
どうやら仕事の話らしい。名前を言い直しながらもジライヤに離席を促すと。
「ん？あぁ、そうだな」と言いながらジライヤは背を向ける「そんじゃま、あいつと一緒にグランドクエストでも行ってきますか。」とひとりごとを言いながら歩き出した。
ジライヤが十分離れたのを確認して、探偵も歩きながら話し始めた。「ツクモ君、必要な情報は何かわかりますか？」
「あの写真についてですかね？」
「それもあります。」探偵は続ける「それに加え、木の上に到達する手段が存在するかどうかも確認しましょう。」
「・・・仮に、あれが〝閃光〟だとして、ゲームの中からあそこに行ける方法があるもんなんですかね。」
「グランドクエストの内容を調べたのですか」スクナは続けた「達成方法は、『クエスト達成後、到達できる専用エリアで妖精王オベイロンに謁見すること』何です。つまり、普段プレイヤーの立ち入ることのできないエリアが存在するんです。そこから行くことができる可能性があります。」
「なるほど」この探偵は一つの行動に対し二つ、三つの結果を想定して動く。今回のこれも、その一つであるらしい。
「まぁ、とりあえず話を聞いていきましょう。」言いながら、スクナは一人で花壇ーー正確には花壇縁にある椅子ーーに座っていた男性に声をかけた。ガタイがよく、リアルなら何かスポーツをやっていそ

うな感じの人物だ。種族は、色黒の肌から見てノームだろうか。
「すいません、少々お話いいですか？」
「あん？・・・っ！あぁ、なんだよ・・・」探偵が、腰を曲げるような姿勢で顔を合わせ男に質問すると、男は探偵の方を見て、膝に手を当てることで強調された小さくはないソレに顔を赤らめ、そらしつつも返答した。
「少し前に話題になった、五段ロケット式飛翔についてお聞きしたいのですが。・・・あの、世界樹の枝にギリギリ届かなかったという・・・」
「あぁ、アレか。オレも知らねえっス。話でしか聞いたことねえし」
「そうですか・・・もう一つ、世界樹の上に行くような技術について聞いたことがありますか？僕は最近始めたのでよく分からないんですが、そのような技術があると風の噂で聞いたんですけど？」
「ぼ、僕ぅ？・・・あ、わりぃ。変な反応しちまった・・・」
「いえ、大丈夫です。気にしてませんよ。」
「そうか、わりぃ。・・・世界樹の上に行くってなると、やっぱグランドクエスト・・・だっけか、あれっスかね。だけどありゃ無理っス」
「無理、とは？」
「ああいうのなんつうんだっけ・・・数の暴力？」
「数の暴力？」
「なんか、たくさん出てくんスよ。最初四体ぐれぇなんスけど、倒すのにちょっと目ぇ離した隙に十体ぐれぇになってて、最後数え切れねぇくらいの数になってたっス。」
「なるほど。ありがとうございました。」探偵は深く頭を下げた。どうやらほしい情報は手に入ったらしい
「いいっスよこんなんでいいんなら」男は突然頭を下げたスクナにブンブンと手を振ると、不意に立ち上がった。「やっべ・・・そろそろ時間なんで失礼するっス」
「いえ、お引止めしてすいませんでした。」
「べつにいいって・・・じゃあこれで」言いながら男はその場を立ち去った。

その後、複数の人物に聞き込みを掛けても、最初の男が言ったことと同じようなことしか知ることが出来なかった。

「・・・ツクモ君。クリア不可能なほどの人海戦術を用いるクエストは、あり得るのでしょうか。」

「あり得ません。正直、『空を飛べる』ってことと『他のクエストは絶妙なバランスが設定されている』ってのが無ければ、十分クソゲー認定されててもおかしくないです。大不評云々より前の話です。」

数の優位が戦場の優位となりかねないこのシステムにおいて。プレイヤーを超える人海戦術は、クリアさせる気など一切ないと言っているのと同じようなものである。

「あり得ない手段を取ってまでクリアしてほしくないクエスト。いえ、到達してほしくない空間ですか・・・何かあるとみて間違いありませんね。」

「どうします、そろそろ1時過ぎますよ。今日午前4時からサーバーメンテなんで、そんなに人こないと思いますよ。」

「今日はここまでです。続きは明日行いましょう」

「分かりました、とりあえず宿探しますか。自分の種族の領地以外でログアウトすると。待機状態っていう無防備状態になるんで。やられちゃわないように部屋に鍵かけてログアウトした方がいいんです。」

「なるほど」探偵は頷きながら、足を進めた。

――――――――――――――――――――――――

「彩君、結城明日奈さんの容体を確認してもらってもいいでしょうか。」

ＡＬＯを終了し、睡眠を取ってから事務所に行くと、直斗さんが言った。コーヒーの入ったコップを探偵の前に置くと、ありがとうございますといいながら続けた。「僕は他に気になる部分を調べて来ます、何か異常があったらメールをください。」

「分かりました、それじゃあ行ってきます」言いながら事務所を出ると、車で明日奈さんの居る病院に向かった。

明日奈さんのいる病室へと入ると、そこには昨日も見た黒い髪の少

年と、少年同じ髪色を持つ少女がいた。
「失礼しまー・・・あっと、和人君だっけ。」
「えっ!?」少年が驚いて振り向くと、すぐに肩の力を抜いた「えっと・・・灰原さん?」
「お兄ちゃん、知ってるの」となりにいた少女が和人君に聞く、どうやら彼の妹らしい。
「昨日会ったんだ。」少年が紹介しようとしたところで、少々強引かつ失礼だが、自己紹介させてもらう。
「灰原彩と言います。明日奈さんの・・・関係者ですかね。」
「明日奈さんの・・・」少女は、ぎりぎり納得したような顔で話し出した「桐ケ谷直葉です、兄がお世話になってます。」
「お前は俺の母さんか」・・・妹の自己紹介にお兄さんが呆れた顔をした。「別に変な人じゃない、明日奈が起きないのを心配してくれてるだけだ。」
「お兄ちゃんの『変な人じゃない』はあんまり信用できないんだよね〜」
「なんでだよ!」
「仲いいんですね」唐突に始まった漫才にそんな返答をしながら。明日奈さんの方を見る。見た限りでは、特に変化はないようだ。・・・それを良いということは、とてもじゃないが出来はしない。
「とくにお変わりなしですか・・・素直に喜べませんが。」
「あぁ・・・」
漫才を切り上げた和人君も回りこむようにベット横の椅子に座って、目覚めない彼女に目を向けた。
不意に、となりから息を飲むような声が聞こえた、見ると。直葉さんが、驚いてしまったような、泣きそうな顔でベットを、正確にはベット向かいの和人を見ていた。
ここにいてはいけない、何故かそう感じてしまい、病室を後にした。
車に戻ると、不意に携帯が鳴り出した。ポケットから取り出して確認したすると、直斗さんからの電話だった。
「もしもし」運転に入る前に電話にでる「どうしました、直斗さん。」

『彩君、今どこにいますか？』
「明日奈さんの病院の駐車場です。ちょうど車乗ったとこでした。」
『ちょうどよかった。今、その近くの喫茶店に来ています、迎えに来てくれますか？』
「近くの喫茶店ですか、わかりました。」
どうやら彼女も調査でこの近くに来ていたらしい。詳しい場所を教えてもらい行くと、探偵は着いた矢先に助手席にもぐりこんだ。
「すぐに出してください」彼女の珍しい早口に押されるように車を発進させる。「近くにいていて助かりました」
「何かあったんですか、そんなに慌てるなんて珍しい。」
「先ほど、須郷さんの所属するレクトをよく知る方に話を聞いてきました。」
「なるほど、何かわかったんですか。」
「いえ、重要な部分は聞き取れませんでした。しかし、」と探偵は続ける「挙動がおかしかった。あれでは何かあるのがバレバレです。」
「何かあることが分かった。って感じですか」
「そういうことですかね。」
探偵は言うと、急に前を指さしながら言った「見えました、あの車です。追いかけてください。」
直斗さんが指さす車を見る。白い乗用車だった。
「わかりました。ナンバープレートは？」
「今、全て書き止めました、後程調べてみましょう。今は追ってください！」
「分かりました、とりあえず間に一台入れさせますよ。」
言いながら速度を落とし、車を一台向こうとの間に入れてレンタカーのあとを追う。しばらく追うと不意にレンタカーが店の地下駐車場に入っていった。
「どうします、追いますか。」
「いえ、このまま通り過ぎてください」
言いながら探偵はカバンからカメラとレコーダーを取り出した「そして、僕を途中で下ろして、そのまま待機です。」

「分かりました。」
車を道の脇に停めると、探偵は努めて普通にドアから出て、先ほどの駐車場へ向かった。

探偵の帰還～そして協力者～

しばらくすると先ほどの車が駐車場を出て、すぐあとに直斗さんも現れた。車に乗ったのを確認してから発進させる。

「よく知るなんてものじゃなかった」直斗さんは吐き捨てるように話し出す。「須郷さんとつながっていましたよ。」

誰がと聞けば、先ほど話を聞いた相手がと答え。探偵は続ける。

「病院で依頼は遂行するといった手前、あちらに情報を漏らさせたくなかったのですが・・・」直斗さんは悩んだ末、首を振りながら続ける「いえ、すぎたことです。情報も手に入ったし、向こうに反応させずに終わらせましょう。事務所にお願いします。」

言いながら携帯を取り出すとどこかへ電話をかけ始めた。

「分かりました。」

いったいどんな情報を手に入れたのか気にはなったが、それで探偵の邪魔をしては本末転倒だと、黙って進路を探偵事務所へと向けた。

事務所に着くと、その前で見慣れない男が立っていた。無難な黒いスーツに黒縁メガネをかけた彼は、車から降りた探偵を見つけると、おっ、という顔をして近づいてきた。

「いやぁ、まさか僕の方が先につくとは思わなかった。」

「菊岡さん、暇なんですかあなた」

いやぁはははと男が笑いごまかすと、だいぶ諦めたような顔をした探偵から紹介をされる。

「菊岡誠二郎さん。国家公務員で、ＶＲ空間に関する事件を扱っている人物です」

「ご紹介に上がりました、菊岡です。よろしくね、灰原くん」

直斗さんの紹介に合わせるように手を出す男ーー菊岡さんの顔にはニコニコとした笑顔が張り付けられていた。何故名前を知っているかと思いながらもこちらも手を出し握手を交わすと、探偵はさっそく本題を切り出した。

「今日は、2，3聞きたいことがあったので、呼び出させてもらいまし

た。」探偵は事務所の鍵を開け、彼を迎え入れる「仮想空間、正確にはナーヴギアに関するものです。」
「それは構わない。だけど、わざわざ僕が来る必要あったかな？」言いながら、菊岡さんは、事務所の中に入っていく「電話とかでも十分な気がするけど。」
「何処から情報が洩れるか分かりませんから。」探偵はコーヒーを入れるように指示をして。菊岡さんをソファに促し、その対面に座る。
「それに、結果としてかなり大きな事件になる。もみ消されるわけには行きませんから、念のため。」
「なるほど、ある程度上の人に話を通したかったと。」ソファに座った菊岡さんが納得したように言い、さらにその目が探偵を鋭く射抜く。
「・・・僕がここで、君たちの口封じをする可能性は？」
「ここには、僕が仕掛けた盗聴器とカメラがあります。」言いながら探偵は、部屋をぐるりと見渡す。「壊しきれないよう細工をしたモノがたくさんね。」
「・・・」ここまでの静かな口論に屈したのは菊岡さんだった「降参、何が聞きたいんだい？」
　コーヒーの入ったカップを二つのせたトレイを二人の元へ運び、それぞれにカップを渡す。菊岡さんがすぐさまテーブル上のビンに入れていた角砂糖を入れたあたり、苦いコーヒーは苦手なようだ。
「では一つ目」探偵は、指を一つ立てながら言った。「ナーヴギアによって、洗脳を行うことは可能かどうかです。」
「・・・急にすごいことを聞くね。」コーヒーを口にしていた男はぎょっとした顔をした後、顎に手を当てながら考える「可能かどうかなら、可能だね。そもそもあれの行うＶＲゲーム自体が脳に直接刺激を与えて仮想空間を作り出している、脳をレンチン出来るような威力を出せるナーヴギアなら、記憶障害、精神障害を起こせるだろうし、洗脳が出来てもおかしくない」
　ナーヴギアによる処刑をレンジでチンと同様の感覚（原理は一緒だが）で話す彼に少々引いたが、探偵は続けた。
「二つ目。もし、仮想空間内で監禁行っている場合、加害者を罪に問う

ことはできるか。」
「・・・どうだろう」菊岡さんは真剣に考えこみだす「まだそこらへんの法整備が終わっていないから、どうとも言えないね。」
　そうですか、と返答する探偵に、菊岡さんは逆に質問をした「もしかして君は、ＳＡＯ未帰還者３００人ことについて言ってるのかな？」
「その通りです。」情報の礼を情報で返すように、探偵は続けた「とある人に、ＡＬＯのアクセス状況を監視してもらっていました。」
「ちょっと待って」続けようとした探偵の話を菊岡さんが切った「ＡＬＯのサーバーはＳＡＯのコピーだ、ソレに介入できたのかい？っていうか犯罪じゃ「犯罪は、」
　お返しとばかりに探偵が菊岡さんの話を切る
「法に整備され、誰かに証拠を突き付けられて始めて犯罪たりえます。だからこそ、僕は証拠を集めるんです。」
　どんな手を使っても、と言外に語る探偵に、菊岡さんは押し黙る。依頼と事件の解決について、彼女の考えはとても固い。柔らかく考えられない代わりに、そうと決まれば、網があろうが突き破る。
「話を続けます」探偵は続ける「その人が言うには、今日の午前４時から、サーバーへのアクセスが３００人余りになっています」
「・・・？」菊岡さんは首をかしげる。「それがいったい何なんだい？オンラインゲームとしてはかなり少ないとは思うけど。」
「いや、菊岡さん。明らかに多すぎます」
　どうやら菊岡さんにはこの異常がわからないようだ、仕方がないだろう。
「オンラインゲームのメンテナンスなんて、ゲームの外からプログラムを整備するだけでいいんですから。」
　誰も、自分がやらないゲームの定期メンテナンスのタイミングなど覚えているはずがない。

「・・・！プレイヤーが入ってこれない時間か!?」菊岡さんは座っていたソファを立ち上がりながら叫んだ。
「その通りです。」直斗さんが答える。「メンテナンス中にも拘わらず３００人もの人物がアクセスを続けている。しかも、その３００人はある共通点がある。」
「・・・共通点？」菊岡さんは息を整え、ソファに座り直す。「もしかして、それがＳＡＯ未帰還の３００人だ、といえる証拠かい？」
「その３００人は」探偵は、質問を無視するように。・・・その質問に答えた「ほとんど全員が各病院にあるナーヴギアから接続を行っています。いくつかのＩＤが病院から許可を得て確認したものと一致しました。」
　探偵は机に置いておいた封筒の中から３００人ぶんのアクセスについて乗ったスクリーンショットのプリントと、デジカメで撮ったものをそのままプリントした、ナーヴギアと思われるもののＩＤが乗った写真をいくつか見せた。確かに、その写真と同じナンバーがファイルに書かれているものにも存在している。
「・・・確定、だね」菊岡さんは天を仰いだ「その３００人はＳＡＯ未帰還者だ。そうなると、僕は仮想課の人間として、君達の活動に協力しなければならない。何かやってほしいことはあるかい。できることならやってあげるよ。」
「彼の保護を」探偵は新たに写真を取り出す。一人の男が須郷信之と会話している写真だ。「僕が秘密裏に須郷さんについて調査していた際にあった人物です。名前は高田太郎。どうやら証人になりえるようなので。」
　どうやら今日会ってきた人物のようだ。先ほどの地下駐車場で撮影していたものだろう。
「すでに裁判についても考えていたのか。すごい手腕だな。」
「・・・ほめ言葉として、受け取っておきます」探偵が言った。
「分かった、」菊岡さんは頷いた「僕が動かせる人に話を通しておこう」
　だけど、と菊岡さんはさらに続けた
「君が言ったことを返すなら、彼の行為は、まだ法として整備されてい

ない。このままじゃ不起訴処分で終わってしまうよ」
「その時は」探偵は、ノータイムで答えた「何とかします。・・・僕たちの仕事が完了したら。何もしなくてもボロを出すでしょうから。」

再起、調査～そして確定～

午後3時過ぎ。サーバーのメンテナンスが全て終わった後。直斗さんは、またスクナとしてーーツクモと共にーーＡＬＯに立っていた。

ログアウト場所として利用していた宿から降りると、見知った男女を見かけた。

「リーファさん」話しかけたのはスクナさんだった「それにキリトくんも、無事だったんですね。」

「おう、」キリトが軽快に答えた「メンテギリギリでアルンにこれたんだ。・・・そっちも大丈夫だったんだな。」

「よかったぁ」リーファも安心したように話す「近くにいないもんだからびっくりしちゃった。」

「そもそも飲まれていませんでしたからねぇ。」

「僕たちはこれから世界樹へ挑戦しようと思っています。君たちはどうでしょうか」探偵は行った。確かに、これから世界樹へ攻め込むためには、少々人数が足りない。今回は、リアルの都合でヒミコが来ておらず、こちらは先輩を含め二人しかいないのだ。

「いいぜ、俺たちも今から行こうとしていたところだ。」少年は言うが速いか、向こうのパーティからの参加依頼が目の前に現れた。探偵が『ＹＥＳ』ボタンを押すと、スクナの下に新たに二つのステータスバーが出現する。

「それじゃあ、行きましょう」スクナの呼びかけに答えるように、ドアを開け外に飛び出した。

「うわぁ・・・」顔から感動を隠さずにリーファは声を漏らした。

現実より一日が短く設定されているアルヴヘイムーー夜しかできない人物に対する配慮だそうだ。ーーにおいても今日の午前1時ごろのアルヴヘイムは太陽が沈み初めていた。そのあとにヨツンヘイムから脱出したのなら、アルンはそのころ真夜中であったはず、中世ヨーロッパのような街並みは、昼と夜じゃ印象が大きく変わるのだろう。

「いろんな種族が、ああやって歩いているのって・・・なんかいいね。」
どうやら街並みではなく、様々な種族がいることに感動していたようだ。
「アルンにずっといると、むしろ一種族だけの方にいわｋ「どうしたんだ、ユイ？」」
リーファの言葉に皮肉を飛ばそうとすると、キリトの声が何故か強く響いた。そちらを見ると、彼の胸ポケットにいた小さな妖精が食い入るように上空を見つめていた。
「・・・上空、世界樹方向・・・！」ユイは空を見つめ続ける
「このプレイヤーＩＤは・・・ママです！ママがあそこにいます！」
そこからのキリトの動きが速かった。
急に背中の羽を震わせると、目に止まらない速度に雲の向こうへ飛び上がった。
「キリトくん!?」シルフも慌てて羽を広げ空へ飛んでいく。
「僕たちも行きましょう!!」探偵も空へ飛び立つ。
「分かりました」
探偵と並走するように飛んでいくと、雲を抜けた先で、キリトが空に弾き飛ばされた。空には弾き飛ばした場所から波紋が広がっている。『進行禁止エリア』。システムによって作られた絶対の障壁である。
「止めて、キリト君！」リーファが落ちてきた彼を受け止める「そこから先には行けないんだよ!!」
「ユイちゃん！」スクナが追いつき、体制を整え再突進しようとするキリトの、傍らにいた小さな妖精に呼びかける「緊急アナウンスのようなものはありませんか！」
「警告モードがあります！それなら届くかも・・・！」言いながらユイが空へと呼びかける。「ママ!!私です!!ママ!!」
ユイの叫びの後、何かが空から落ちてきた。長方形の薄い板が、光を反射している。いつの間にか剣を抜こうとしていたキリトが、手を器にして板を手に取る。しばらく全員でこれが何か話していると、不意にユイが板に触れて、叫んだ。

「これ・・・システム管理用のアクセスコードです！」
「アクセスコード？」探偵が素早く反応した「ということは・・・これを使えば、システムに介入できるんですか？」
「いえ・・・」ユイは悲しげに言う「ゲーム内からアクセスするには、コンソールが必要です。私でもシステムメニューは・・・」
「無理・・・ってことですか。でもそんなモノが落ちてくるってことは・・・」
「この上にキリト君の目的がある。」
　探偵の言葉にキリトが相槌を打つ。
「リーファ、」キリトが言った「教えてくれ、世界樹の中に通じるゲートはどこにあるんだ？」
「・・・木の根元のドームの中だけど・・・」リーファは眉を寄せた「でも無理だよ、あそこにはガーディアンがたくさんいて、どんな大軍隊でも突破できなかった」
「それでも、行かなきゃいけないんだ」
　言い切ったキリトの目は、覚悟に満ち溢れていた。
「今までホントにありがとう」キリトは二人を見て言う「ここからは俺一人で行くよ」
　言いながらリーファの手を離させ、頭を下げてから、黒い剣士は降下していった。
「行ってあげてください」探偵はリーファに言う「おそらくですが、彼にはあなたが必要です。」
　リーファがその声に振り向くと、目に浮かべていた涙を飛ばすかのように、急降下していった。
「どうするんですか先輩？」
「少々気になることがあります」探偵は言いながら右手のボウガンを展開する「一つは、この障壁が、どの程度の物を通すかどうか。」
　太矢をボウガンにつがえると、探偵はソレを空に向かって放った。空気に波紋が発生し、太矢ははじけてポリゴンへと砕け散った。
「遠距離・・・いや」言いながらストレージを操作し、何時の間にか手に入れていた小石を上に放り投げる。小石は太矢と同じ末路をたど

る。さらに剣を抜いてたたきつける。空に波紋が起こり、剣もろともはじき出される。
「どうしたんですか。」
「上に何かある・・・もしくは何かが行われていることは確定です」探偵は納得がいったようだった「先ほどのカード・・・アクセスコードだけが障壁を通ってこちらに来ました。おそらく、あれはこちらに落ちてくることを想定していなかったのでしょう。あとは、彼が追っている人物、『ママ』が誰なのかが分かれば・・・行きましょう、後を追います。」
「分かりました。」急降下を始めた探偵の追い、しかし地面に激突しないように、羽を休めながら降りていく。否、落ちていく。

空から世界樹の根元にある扉ーーグランドクエストの開始地点ーーに降りると、そこには金色の髪のエルフが、手のひらに乗せたリメインライトに向けて何かを振りかけていた。振りかけられたリメインライトは輝きを増しながら人の形をとっていき、キリトの形を残して霧散した。
「ありがとう、リーファ」キリトは蘇生させたリーファーー蘇生用アイテムは結構高価だーーに礼を言った「だけど、あんな無茶はもうしないでくれ、これ以上迷惑はかけたくない。」
「迷惑なんて、あたし・・・」言いかけるリーファを半ば無視するようにキリトは扉へと向かう。「待ってキリトくん！一人じゃ無理だよ！」
「それでも」呼び止めたリーファを振り払うようにキリトは言う。「行かなきゃいけないんだ」
「なんで・・・」リーファの声が小さく響く「いつものキリトくんに戻ってよ・・・わたし、キリトくんのことが
「もう一度・・・アスナに会わないと、何も始まらないんだ」
・・・えっ？」
リーファの顔に驚愕が浮かぶ「いま、なんて、」
「・・・？」キリトは首をかしげながら答えた

「あぁ、アスナ。それが俺の探してる人の名前だよ」

「・・・確定。ですか？」

「そうですね。」空に浮かびそれを聞いていた探偵に問えば、とても簡単な答えが返る。「一旦宿に・・・というか、現実世界に戻りましょう。依頼していたアレが使える。」

「分かりました。」言いながら、近場の宿へと向かい、その場を後にする。

この時探偵は、あのシルフの少女の正体を知らなかった。

旧友～もしくは作戦会議～

「・・・これは、」手に持っていたカードをいじっていると、探偵が声を上げた。「彩くん、昨日ＡＬＯで最初に話を聞いた人物を覚えていますか。」

「あのノームの男性ですか？覚えていますけど、それが？」

いいながらその姿を思い出す。確か、大剣を背負っていたはずの男だ。

「彼が、僕の友だちでした。」探偵は額に手を当てた。「もっと言えば、彼が僕たちのことを手伝うとメールしてきています。」

「手伝ってもらうんですか。」

「・・・仕方ありません」探偵は。「借りを返しておいてもらいましょうか。」

どうやらメールには〝直斗には借りがある〟といった内容が書いてあったようだ。

「彼の名前、なんていうんですか？あ、アバターの名前です。」

「メールに書いてありますね。」探偵は問いかけに答えた

「彼は・・・【ミカヅチ】。ＡＬＯではそう名乗っているようですね。」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「改めて、巽完二！よろしくお願いするッス！」

「リアルの名前出すんじゃねえよ・・・」

「あっと、そっスね、すんません。【ミカヅチ】っス。」

再度ＡＬＯで世界樹の元へ向かった探偵に待っていたのは、シルフのニンジャとノームの大剣使いだった。大剣使いはミカヅチと名乗ったーーリアルの方も言っていた気がするが忘れることにしたーー。

「協力ありがとうございます。」探偵は答える。「・・・本当は、僕達で終わらせるべきものなのですが・・・」

「いいだろそんなの」ミカヅチが言った「何も言わなけりゃいいんだろ？」

「・・・そうですね。」探偵は妥協したようだ。「そうしてくれると助かります。」
「お、スクナとツクモじゃないか」
探偵と大剣使いが会話をしていると。黒い剣士とシルフが空から現れた。どうやらあの後、リーファは引き止められたらしい、どうして空から現れたのかは分からないが。
「さっきぶりだな」キリトが軽く挨拶すると、横に立つ二人に顔を向けた「えっと、あんたはジライヤだったな。じゃあアンタは・・・」
「アん？なんだお前ら。」ミカヅチがガンをつける。「なんかようか？」
「あ、あぁ・・・」キリトが引きながら答えた「さっきまで協力してたからさ・・・。」
「なァんだ、そういうことかよ」ミカヅチはすぐに納得して顔を引いた「俺も手助けしてんだ。ミカヅチだ、よろしくな。」
「あ、はい」キリトは混乱しながらも言った「よろしくお願いします・・・？」
「・・・ミカヅチ君」探偵は頭を抱えた「全くもう・・・お二人は、グランドクエストはクリアしたんですか？」
「まだよ。」答えたのはリーファだった、彼女は広場にいたシルフを指さした「今から再戦。そこの【レコン】を連れてね。」
「うぇえぇ!?」広場にいた緑のおかっぱ頭が特徴的なシルフーーレコンは叫んだ「聞いてないよリーファちゃん！」
「頑張ってね」リーファは無情にもその文句を切り捨てた。
「そうですか、」探偵は頷き、笑みを浮かべる「戦力は多い方がいい、ぜひ一緒に戦いましょう。」
「あ・・・」レコンは顔を赤らめた「はい！頑張りましょう」
紹介を終えて、全員で兵士の彫像に挟まれた大きな扉ーーーグランドクエストのスタート地点ーーーに臨む。
「っと・・・」
ユイ、いるか。と、キリトは何かを思い出したのか胸元のポケットへと呼びかける。
それにこたえるように、昨日も見た小さな妖精が頬を膨らませなが

ら飛び出してきた。
「もう、遅いですパパ！」ユイは怒った「パパが呼んでくれないと出てこられないんですからね！」
「悪い悪い。ちょっとたｔ「「かわいい・・・」」・・・っへ？」
　キリトが謝ろうとしたセリフをレコンとミカヅチが遮った。二人とも目をキラキラと輝かせるように、ユイを見つめている。
「なんだコイツ、可愛いなぁオイ！」
「これがプライベートピクシーって奴!?始めて見たよ！」
「へぇ、コイツ、プラ何たらっていうのか、すげぇな！」
「な、なんなんですかこの人たちは!?」
「こらレコン！恐がってるでしょ」
「ミカヅチ君、抑えてください。」
　レコンをリーファが、ミカヅチをスクナが、それぞれ引っ張ってユイから遠ざける。
「すいません」スクナがミカヅチの代わりに謝る「彼、可愛い物に目が無いんです。」
「コイツのことは、」リーファがレコンの代わりに謝「気にしなくていいから」レコンのことを突き放した。
「・・・ドンマイ」落ち込むレコンを慰めたジライヤは、そのままみんなに問いかける「つってもどうすんだ。あいつらトンデモねえぞ。」
「そうだな・・・」キリトは答える「倒すのはそこまで難しくない、問題は量だな。」
「先ほどの戦闘なんですけど」ユイがそれに補足する「最大で秒間１２体のポップが確認されました。」
「ゴールまで一直線に殲滅しても、たどり着く前に落とされるか。」
「そうですね」問いかけにユイは答える「遠距離攻撃も豊富です。剣の投擲、その後は光の矢による魔法攻撃を行います。」
「援護すっとそっち狙いやがるしよぉ」ミカヅチが相槌を打つ「メンドクセぇよなホントに。」
「そうなのか?」その声に驚いたのはキリトだった。「行動パターンから別物なのか・・・」

「気付かなかったのか・・」ジライヤが呆れる「支援魔法もヘイト上昇の行動になってるみたいだ。回復役を先に落としてくる。」
「ではそちらの護衛も必要ですね。」スクナが言った「そして、離れすぎない程度の距離を保つ。」
「・・・そうだな」キリトが言った「純粋な魔法使いはいないみたいだから自衛はできるけど。」
「ミカヅチ、護衛回ってくれ」ジライヤが言った「そっちの方が得意だろ。」
「うス！」ミカヅチは二つ返事で答えた。
「そろそろいいな」キリトが言う

「行くぞ！」

挑戦～もしくは心強い応援～

『いまだ天の高みを知らぬものよ、王の城へ至らんと欲するｋ『さればそなたが背の双翼の、天翔に足ることを示すがよい』

キリトが素早くスクリーンを操作しーー早すぎてシステムボイスが食い気味になっていたーー門を開くと、全員が素早く突撃し戦闘態勢に入る。中は大きな円筒上で、真ん中くらいから鏡か硝子のようなものがはめ込まれている。どうやら世界樹の内部がほとんどがこの円筒でできているようだった

「上だ!!」突入と同じにジライヤから声が飛ぶ。上を仰ぎ見ると、はるか遠くの天井に大きな円形のトビラがありその周囲とそこから延びる様にはめられた鏡から、鎧を着込んだ何者かが現れた。

「三人とも、援護を!」スクナの号令の直後、リーファ・レコン・ジライヤの詠唱を後ろに聞きながらキリトと共に突撃する。

行く手を阻む妖精騎士を、両手に握るハルバードで薙ぎ払う。開いた空間にキリトが飛び込み、妖精騎士の壁に傷跡を刻む。

傷跡に飛び込みハルバードを振るい傷跡を広げる。

遠くから形無き弓を引く騎士は、スクナのボウガンに撃ち落され、それでも放たれるわずかな矢は簡単に切り払われる。

後ろから聞こえる怒号を聴く限り、殿を務めるミカヅチもその力をふるっているようだ。

少しの作戦会議とわずかな戦闘時間の中で作られた連携は意外にも順調に機能し、七人は着実に騎士の壁を進軍していく。

しかし、その進軍は、着実であったが低速だった。

「まずい・・・」思わず声が漏れる「撃破が追いつかない、時間が立てば立つほど壁が強固になっていってる。」

「・・・直線状に敵が集まっています」スクナが戦闘を俯瞰するように言った「こちらが扉まで最短距離で進むとそうなるようになっているのでしょうか・・・。」

「それじゃあ後ろは?」言いながら首を回して後ろを見る「前に回してるなら後ろが手薄になっていたりとかは・・・」

そこには懸命に詠唱を行う三人と、その後ろで大剣をふるうミカヅチ、そして周囲を取り囲む妖精騎士の群れがあった
「・・・そう上手くは行きませんか」呟くように言う「どうします？これ以上は無理・・・とは言いませんがきついですよ？」
「・・・キリトくん！」スクナが叫ぶ。それに合わせてキリトの前に行き得物で敵を薙ぎ払う。「作戦を練り直します！一度引きましょう！」
「・・・クソッ！」キリトは悪態をつく「こうしている間にもアスナが・・・
「アスナさんを助けるために！」スクナが叫ぶ「今ここでやられるわけにはいきません！」
キリトはその叫びに目をさまよわせる。数瞬の葛藤の後、彼は首を縦に振った。
姿勢を反転させ撤退しようとしたその時、後方で待機していたジライヤに謎の光が当たった。
「うおっ・・・!!?」当てられた本人も想定外だったのか、驚く「今の・・・【スポットライト】か!?」
【スポットライト】。プーカの得意とする【呪歌】スキルで手に入る高ランクの補助魔法。
その能力は『味方一体へのヘイト最大化』。その効果を付与されたジライヤに、全ての敵の目線が集まった。
「・・・まじかよ」ジライヤが素早く回避運動を始めると、見えない飛行機雲を居抜くかの如く光の矢が降り注ぐ「うおあっぶね！ってか誰だよ使ったの!?」
「やぁっと、追いついた・・・」
息を切らせながら飛んできたのは、槍を持ったプーカ、ヒミコである。どうやら先ほどの【スポットライト】は彼女の物のようだ。
「ヒミコさん!?」スクナが驚いた「今日は仕事があるのでは!?」
「そんなのちゃっちゃと終わらせてきたよ。」ヒミコが言う
「それに、来たのは私だけじゃないよ！」
言いながら後ろを振り向いた彼女の目線の先にいたのは。
後ろにいた妖精騎士を蹴散らす大量のドラグーンの群れとシルフ

の軍団だった。
「間に合ったようだな」シルフの軍団を引き連れていたサクヤが言った「レプラコーンの職人衆に大急ぎで作ってもらったが、それでも時間がかかってしまった」
「お金もネ」ドラグーンの群れーーケットシーの精鋭部隊である『ドラグーン隊』ーーを引き連れてきたアリシャが苦笑交じりに続ける「キリトクンがくれたのも合わせてすっからかん。これで死んだら大破産だヨ。ＡＬＯの歴史にのっちゃうネ」どうやら今現在隣を飛んでいる黒い剣士は、二人に資金援助をしていたようだ。
「不名誉極まりないな」サクヤが苦笑する「さて、指揮官は君かな、スクナ。そのまま任せよう」
「分かりました」
　言いながら黒猫は目を閉じ考える。わずかな時間のあと見開かれた目には、勝算が映っていた。
「範囲攻撃で一掃した後、一点突破で到達します！」スクナが指示を飛ばす。
「アリシャさん、サクヤさん、範囲攻撃の準備をお願いします！」
「オッケ！ドラグーン隊、ブレス用意！」
「了解した。シルフ隊、エクストラアタック用意！」
「リーファさん、レコンさん、ヒミコさんはありったけの援護を！攻撃力と飛行速度を優先的に！」
「分かった！」
「う、うん！」
「よっし、プレリュード行くよ！」
「キリトくん、スクナくん、ミカヅチくんはこちらへ！突撃の準備をお願いします！」
「分かった！」
「はい」
「おう！」
「ジライヤ先輩・・・
　飛び回って敵を引き付けてください！」

「俺だけ重労働すぎねぇ!?」
スクナの号令によって移動する。
ヒミコがスピアを掲げて歌いだすと、たちまち周囲に五線譜のエフェクトが現れた。
【呪歌】、周囲の味方ＰＣを等しく強化するプーカの得意技だ。
ジライヤは大きく飛行して妖精兵士を引き付けた。
時に矢をよけ、時に剣を避け、
あっという間に敵が一つの場所に集まりきった。
「今です！」スクナが叫ぶ「範囲攻撃！」
「ちょま「フェンリルストーム放て！」「ドラグーンブレスぅ撃ぇ!!」っぶねぇ！」
二人の領主の号砲に合わせ、暴風と灼熱が兵士とジライヤに襲い掛かる。ジライヤは緊急回避しわずかに掠った程度で済んだが、ルーチンで動く天使の群れはそうはいかない、全ての天使が炎と竜巻で一掃された。
「総員突撃！」
「行くぞ！」
スクナとキリト、どちらが速かったか。号令と共に攻撃力上昇の呪歌【序曲～プレリュード～】を受けた八人が宙を飛ぶ。
「キリトくん！」支援魔法の詠唱をあらかた終えたリーファが、腰の剣を抜いて投げ飛ばす「使って！」
「サンキュ！」キリトは投げ飛ばされた剣を左手に掴むと、右手に持った自分の大剣と共に振り回す。新たに生み出される妖精騎士はその二刀流が切り伏せる。
「ちっ・・・うぜぇ！」なおも現れる騎士に、ミカヅチは悪態をつき、突撃した。「邪魔すんなオラぁ！」怒声と共に両手剣が振るわれ、さらにその数が減る。
「ツクモくん、右は任せます！」スクナは言いながらキリトの左側に飛ぶ、それに合わせて右側へ飛び、そこに飛ぶ騎士をハルバードで吹き飛ばす。
時間にして数十秒、先ほどまでとは段違いの進軍速度で天蓋の頂

点、そこに在る扉にたどり着いた。

「キリトくん！」スクナは叫ぶ「扉を開けてください!!」

「あぁ！」キリトは扉に手を当てた、がそれだけだった「な・・・開かない！」

「うっそだろ!?」ジライヤが叫ぶ「何かたんねえってことかよ！」

「ちょっと待ってください！」キリトの懐からユイが飛びだすと、その両手を扉に当てて目を閉じ、すぐさま見開かれた。「この扉・・・

クエストフラグによるロックじゃありません！

単なるシステム管理者権限によるものです！」

「システム管理者権限・・・？」ミカヅチは質問した「どういうことだ？」

「運営にしか開けられない扉ということです。

言い換えれば、このクエストはプレイヤーには絶対にクリア不可能ということになります。」

「クリア不可能って・・・」ジライヤは呆れたような、絶望したような声を上げる「んだよそれ・・・ゲーム崩壊してんじゃねえか！」

「何それ!?」ヒミコが叫ぶ「クソゲーって奴でしょ！どうにかできないの!?」

「システムにアクセスできればどうにか・・・」ユイは叫びに答える「・・・ここまでくると」スクナは完全に呆れた声で言う「露骨を通り越して呆れてしまいますね・・・システムに干渉する方法があればいいのですが・・・キリトくん、カードキーです！」

「・・・そうか！」キリトは懐に手を入れると、世界観に似つかわしくないカード、つまりシステムに干渉するためのアクセスコードを取り出すとユイに差し出した「ユイ！これを使え！」

「コードを転写します！」

差し出されたカードにユイが手を触れると、そこから浮かび上がった光る文字列がその体に吸収され、もう片方の手の先にある扉へと伝わっていく。一秒も立たずに扉がその手に触れている所から光り出す。

「転写完了！転送されます、皆さん手を！」
ユイの伸ばした手にキリトが触れ、そのキリトに全員が振れると、新たに増えた妖精騎士の大剣を振るうよりも早く、全員がその姿を消した。

空中都市、否研究施設～もしくは探偵の考察二連発～

真っ白な壁。
無機質な通路。
スクナたちが転移した先で見たのはその二つ、それ以外に一切がない〝ただの廊下〟だった。近くにいたのはユイの手を取っていたキリト、そしてキリトの体に触れていたスクナ達。そして白いワンピースを着た少女だけだった。
「・・・ここは？」ジライヤがいう「ここが世界樹の上なのかよ・・・」
「・・・分かりません」少女が言う「ここには、ナビゲート用のマップ情報が存在していません・・・」
「あなたは、」スクナが少女に聞いた「ユイちゃんなんですか？」
「あ、はい、」少女ーーユイが答えた「いろいろ事情があって、こっちが私本来の姿です。」
「ユっユイ」キリトが話を遮るようにユイに聞いた「アスナのいる場所は分かるか？」
「あ、はい」ユイは周囲をきょろきょろと見渡しながら答えた「ここから近いです・・・ちょうど上の方ですね。」
「キリトくん」スクナが言う「私たちは別の所を調べます。ユイさん、アクセスが集中している広い空間は見つけられますか？いえ、アクセスの集中しているかだけでも構いません。」
「・・・難しいですけど」ユイは眉間にしわを寄せながら言った「ここより下の階層に、アクセスが集中しています。・・・あれ？」
「どうかしたんですか？」
「おかしいんです」ユイ問いかけに答えた「アクセスが集中しているんですけど、全員の座標に規則性があるんです。まるで、整列したまま、じっと動いていないみたいな。」
「・・・見つけた。」探偵は静かに、確信をもった「僕たちはそこに行きます、キリトくん、そちらはお任せしますよ。」
「分かった」キリトはその言葉に答え。ユイの後を追うように走り出した。「そっちも頼むぞ・・・じゃないな、健闘を祈る！」

「・・・ええ。」スクナは肩をすくめ、歩き出す。「そちらも、健闘を祈ります。」
「・・・で」歩きながらジライヤが尋ねる「見つけたって何のことだ？」
「・・・はぁ」探偵は、なんでここにいるのか、という目線を向けながら仕方がないといわんばかりに溜息をつき答えた「しばらくは、他言無用でお願いします・・・簡単に言えば、証拠です」
「証拠？」ジライヤは続けた「ってことは昨日言ってた目的って奴か。」
「ええ」スクナは「・・・この際です、皆さんも協力してください。」
「おいおい、そりゃねえだろ」ミカヅチが呆れたようにいう「俺たちは、スクナの手伝いをしに来てんだぜ、なにいまさら言ってんだ。」
「・・・ありがとうございます」探偵は照れくさそうに帽子を下げようとして、下げる帽子が無かったために髪を手で押さえながら言った。
「僕らは一つの依頼を受けました、内容は『ＳＡＯ事件に取り残された三百人の原因を突き止めること。』です。」
「取り残された三百人って、ニュースになってたアレ？」横を歩いていたヒミコが言う「私も情報バラエティで意見聞かれたよ、適当に答えたけど。」
「でもそれで、なんでこのゲームやることになるんだよ」ミカヅチが言った「なんかあんのか、このゲームに。」
「とある情報筋から、未帰還者の目撃証言があったんです。」探偵は答えながら突き当りの前に立つ、その壁には三角形の模様が上下鏡合わせになっていた「その後の調査で、未帰還者が２４時間このゲームにログインしていることが分かりました。」
　探偵が下を向く三角形を押す。三角形は光を発し、目の前の壁が開いた。
「うおっ！」ミカヅチは驚いた「何だこりゃ・・・」
「エレベーターですよ。」探偵は壁の先の空間ーー小さな部屋ーーへ入る。そのまま身をひるがえすと、部屋の外からは死角となっている所に部分に目を向けた。「やっぱり、階層を示すパネルがある。・・・行きましょう。」
　全員が乗ったことを確認してから、探偵が一番下のパネルを押す。

すると、エレベーター特有の浮遊感を感じた。
「マジでエレベーターだ・・・」ミカヅチが言った「なんでんなとこにあんだよ・・・」
「それに・・・」ジライヤが言った「ここにあるのは、空中都市のはずだよな。の割には、殺風景じゃなかったか？まるでどっかの施設みたいだ。」
「そうだね・・・」ヒミコが同意した「全然都市って感じじゃない・・・。」

「どうやら本当に」スクナが言った「このゲームをクリアさせる気はなかったみたいですね。」
「どういうこと？」ヒミコがスクナに聞く。
「おそらく運営が欲しかったのは、〝大型サーバーを運用するための大義名分〟です。」スクナが説明を始める。「何かやましい理由のために、サーバーを使いたかった。それを認めさせるために、ＶＲＭＭＯで外側を作ったんです。
・・・そうであれば、先ほどのクエストの矛盾も理解できる。」
「矛盾？」ミカヅチがその声に返した「さっきの扉がか？」
「そうだな。さっきのクエストがクリアできたのは、あのカードキーとユイちゃんがあったからだ。」答えたのはジライヤだった「てことは、その二つがないやつには一生クリアできなかったんだ」
「その通りです」スクナが同意する「そして、その二つはどちらも彼個人の事情によって手に入れたもの。彼以外では手に入らないものだったんです。・・・そうすると、ゲームとして成り立っていない。彼にしかクリアできませんから」
「クリアできないゲーム・・・」ヒミコは顎に手を当てた「なんでそんなゲームを作ったんだろ」
　会話を続けているうちにエレベーターの止まる感覚と後に扉が開いた。短い通路の先に大きな扉が言える
「そこで最初の結論です」スクナは歩き出した「すなわち、このゲームは大型サーバーを使うための大義名分である、という推理ですね。」

「なるほど・・・そもそもゲームである理由はいらなかった。むしろ、長く遊んでいてくれた方が、やましい理由をカムフラージュできる、ってことですか。」
「ツクモ君の言う通りです」後を追う声にスクナがこたえる「クリアせずに長く遊んでいてほしかったわけですね。・・そして、ゲームであったことには別の理由もある」
「理由？」ミカヅチが後ろから返した「他にもあんのかよ。」
「・・・僕の推理が正しければ」スクナは続けた「その理由は、『データの転送がしやすかった』ということです。同じ形式だったために、こちら側に送りやすかった。」
「ちょっと待て」ジライヤは足を止めていった「さっきお前、ＳＡＯ事件に取り残された原因を突き止めること、っていたよな・・・それって」
「多分、想像の通りですよ」スクナはドアを押しながら言った。
「下手人は『ＳＡＯ事件の被害者を三百人』、このゲームの強制転送したんです。アバターを取り除いて、脳を繋げるシステムだけを・・・ね。」
　ドアが開く。その先に在ったのは巨大な空間、そこに人ひとりが入りそうな水槽がいくつも並んでいる。水槽には人間の脳のようなものが一つづつあった。
「・・・おそらく」スクナはその光景を見ながらーー少し怯えるようにしてーー言った「ここにある水槽の中の脳は、その通り三百人分の脳そのものです。このサーバーから、ナーヴギアを通じて電気的に
　操作できる、ね。」
「・・・フラスコの外って・・・こんな感じ何ですかね・・・」
「言ってる場合じゃありませんよ」スクナは部屋の中に入った「コンソールを探してください。キーボードと、画面があれば構いません。」
「・・・ここにあるもんなのか？」ミカヅチは言った「他のとこに隠したりしねえのかよ」
「人間の心理・・・というものでしょうか」探偵は説明した「人は、大切なものを近くにおいておいたり、自分でやる傾向があります、ミカ

ヅチくんも机の上や近くに編み棒か、裁縫セットがあるでしょう？」
「・・・何で知ってんだよ」ミカヅチは驚く、図星だったようだ。
「君は分かりやすいですから」探偵は微笑みながら続けた
「ここを作った人物・・・仮に、Ａさんとしましょう。僕は彼をここ最近追っていました。
Ａさんにとって大事なのは〝研究の結果〟と〝自分の好きな人物〟。〝研究そのもの〟や〝それ以外の人物〟に対してはたいして考えていません、おそらく、大体の研究を研究者達に任せているんでしょう。」
「・・・もしかして、」ジライヤが気づいた「そのＡってやつの好きな人物が、さっきキリトが言ってたアスナってことなのか？」
「その通りです。」スクナが答えた「これに基づくなら、普段、アスナさんがいる付近にＡさんがおり、それ以外については遠くに離すと考えました、実際アスナさんがいる部屋と逆方向にここはあった、であれば、同じく離されるものが研究そのものです。」
スクナが話している間、歩きながら周囲を見渡していた視界が、強い光をとらえた。
コンピューターのディスプレイ特有の、目の痛くなる黒色光（ブラックスクリーン）だ。
「見つけました」言いながらディスプレイに歩き出す。
「良し！」探偵は思わずといったように声をあげる「ツクモ君、予定道理おねがいｓ
「なんでここに人がいる⁉」
「・・・！ツクモ君！」聞きなれぬ声に探偵が叫ぶ「早くコンソールに！」
その叫びを聞くや否やディスプレイに向けて走り出す。ディスプレイの下には、ホログラムで作られたキーボードが浮いている。その座標にキャラクターのアバターが置かれれば、その点に合わせた文字が入力される。仮想世界ならではの装置だ。
走った勢いのままキーボードに手をつけ、事前に聞かされていた言葉を思い出す。
ーーー現実へと戻った際、探偵は自分のデスクの引き出しから一つ

のカードを手に取った。パッと見はただのＡＬＯのソフトカードーーこれをアミュスフィアの本体に差し込むことで、ＡＬＯの世界に〝飛ぶ〟ことが出来るものーーだった。
「何ですかそれ？ＡＬＯのカード？」
「プログラムを追加で入力したものです」尋ねた声に探偵は言う。
「・・・それ、〝入力〟の前に〝不正〟ってつきません？」
「・・・そうですね」返す答えに探偵は一呼吸おいて答えた。
　つまるところチート（ズル）用のカードである。
「安心して下さい、ゲームを有利に進めるものではありません。」探偵は弁解するように言った「これはとある人物に作ってもらった。サーバー侵入用の物なんです。サーバーに？がるコンソール内で合言葉を言うことで、その人のＰＣからサーバーを操作できるようにする、そういうプログラムなんです。」
「ほう・・・。その合言葉とは」
「・・・」探偵は数瞬の沈黙の後答えた「それはですね・・・」ーーー
「『コール・メジエド』！」
　思い出した言葉を叫ぶと、即座にスクリーンの中がウィンドウが出たり消えたりとあわただしくなり、それと同時に若い女の子のような声が頭の中で響き渡る。
『よっしバックドア貫通、ゲーム外から失礼するぞ！さっさとタスク消化だガンガン行こうぜ！
　とりあえずこっち以外の操作を制限、んでもって研究用プログラム・・・コイツだな、ユーザーを解放、ログアウト！
　研究資料は・・・こっちか、んじゃコピって保護して解除に二重パスワード・・・いいや、倍プッシュで三重もってけ！
　ん・・・なんだこのデータ・・・『ヒースクリフ』？まあいいやスルー安定だな。
　・・・あれ、一人ログアウト出来てねぇ！なんでだ!?
　別のユーザーに所有されてる!?どういうことだ!!??
　・・・ユーザーより上位の権限!?運営側かよコレ!?なんでこんなプログラム作ってんだ!?』

おっと雲行き怪しくなってきたぞ。
そんなことを考えながら後ろを警戒しようと振り向いた瞬間、ちらりと見えた画面に再度振り向いた。
見返した画面は砂嵐のように灰色の画面となり、すぐに何かの映像が現れた。
『んお・・何だこの画面・・・マテ、誰が流したんだコレ!?』
それは黄色い背景に、傾きながら奥に落ちる、画面部分の抜けたテレビのコマ撮りの中を進むような映像、
否、
いくつものテレビの中に落ちているような映像だった。
何故か目が離せずにそれを見続けていると、先ほどとは違う、機械音声のような声が、今度は部屋に響き渡るように聞こえた。
【不正アクセスを確認、〝マヨナカオンライン〟を起動します】
それが聞こえた瞬間、
電源を切れるように意識が途切れた

マヨナカオンライン～～もしくは抑え込んだもの～～

油断した・・・！

研究室を見つけ、捜索する間も、僕ーー白鐘直斗は出入口を警戒していた。何時近づかれてもすぐに全員にログアウトを促せるようにしているつもりだった。

まさか、ログイン地点を研究室にしているとは思わなかった！

判断ミスだ。だけど、それを言っている時間はない。

ツクモ君はすでにコンソールを通じてバックドアを完成させている。それは先ほどから彼の向かった方向に輝く光の変化から明らかだ。なら僕たちが必要なのは、彼女のための時間を稼ぐことだ。

「皆さん、こっちに来て下さい！」

言いながら二人の方へ走る。ジライヤさんとミカヅチ君は武器を取り出しながらこちらへ向かい、そのまま研究者ーーナメクジを擬人化したようなアバターをしていたーーから僕を守るような位置に立ってくれた。ヒミコさんも後ろに控えてくれている。

「すでに準備は終わっています。あとは時間を・・」

【不正アクセスを確認、〝マヨナカオンライン〟を起動します】

そのアナウンスが部屋に響いたのはその指示を出す時だった。

その言葉に、僕たちーー〝あの事件〟に巻き込まれた人たちーーはあるものを想起する。

それは空間。

一年前、一つの殺人事件から発展した案件で現れた、深い霧に覆われた一つのスタジオ。ジュネス八十稲羽店の大型テレビから入れる空間・・・。

そこまで考えたところで後ろを振り向いたのは、探偵の勘、というものだったのでしょうか。

振り返ったそこには、あのテレビの中に落ちていく間に見えた光景を流すディスプレイだけ

そこに、ツクモ君はいなかった。
「ツクモ君!!」
叫ぶと走る、どちらの方が速かっただろうか。
気付いたらそのディスプレイに、当たり前のように飛び込んでいた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー再起動、状況を視覚にて確認、学校の屋上の上——
ーーいったい何があったのか、順を追って振り返るーー
ーーキーボードに手を置いて、合言葉(コード)を入力した(言った)ーー
ーーバックドアの開通を確認、スクナの援護に入ろうとして——
ーー【マヨナカオンライン】に引きずり込まれたーー
ーー現状を完了、再度周囲を視覚にて確認ーー
ーー屋上の上、変化なしーー
ーー内容、『状況の打破』ーー
ーー思考開始・・・ーー

「彩君!」
―遠くから聞こえる声に振り向くと、そこには先ほどまで一緒にいた四人が見えた。《ーー聴覚より認識、反応。視覚にて確認、スクナ、ミカヅチ、ジライヤ、ヒミコーー》
「先輩?それに皆さんも、どうしました?」
ーー思考を安定、会話を開始ーー
言いながら四人に近づこうをすると、
肩を掴まれた。
驚きながら振り向くと、そこには一人の男がいた。
「あれは、〝シャドウ〟か!」
ジライヤさんが叫ぶ、シャドウとはいったいなんだ?
「そう、わたしは、灰原彩のシャドウ。彼が抑圧した感情の具現。」
その青年は、茶色いコートに身を包み、にらみつけるような一重の細目が特徴的だった。
男はその顔を呆れたように破顔させせると言った

「あぁ・・・自分の顔も分からなくなったのか。全く・・・」
・・・自分の顔？
おかしい、少なくともこんな顔では・・・
・・・あれ？
そもそも、どんな顔だったっけ？
青年は近づく、何故か離れようとする足は、それでも離れなかった。
「気付いてるかい、自分が一度も自分の事を話していない事に。
気付いてるかい、自分への評価を誰かに押し付けていることに。
気づいているかい、しなくてもいい自己犠牲をしていることに。
気付いてるかい、自分が一度だって
自分のことを、見ちゃぁいないことに」
「お前は人間だよ、他の誰でも、ましてや道具でもない、人間が苦手なだけの人間だ。」
〝彼〟は〝その顔〟を近づけ、言い切った。
「な・・・お前、シャドウだよな・・・？抑圧された・・・」
ジライヤさんの声が遠くに感じる、それほどに、彼の言葉は響いて
「シャドウですよ、私は、この子の、〝俺〟のシャドウです。」
続く言葉に、〝何か〟が反応して、とても立っていられなくなりうずくまる
「私は〝俺〟の、抑圧された感情、思想。」
・・・違う
「この子が、灰原彩が、心の奥底に丸ごと一気に押し込んだ。」
・・・違う、違う！
「〝俺は人間である〟という自己意識の暴走です。」
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違うちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうち

がうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうちがうち
がうちがうチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチ
ガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチ
ガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウチ
ガウチガウチガウチガウチガウチガウチガウ

「違う!!」

　体を無理に立たせて叫べば、〝その顔〟はとても近くにあった

「違わないよ、君は人間だ、まぎれもない人間だ。違いなんて一つもない。

　どれだけ意思が無いように努めようと、

　どれだけ自分の意識を抑えようと。

　間違いなどなく君は人間なんだ、逆立ちしたってモノにはなれやしない。」

「お前に何が「分かるんだよ」・・・!?」

「分かるのさ、お前が人間だと、お前に何があったかも分かる。だって・・・

　〝私〟は〝俺〟で、

　〝俺〟は〝私〟なのだから。」

「・・・〝俺〟は・・・・」

「駄目です、駄目だ!それ以上は・・・「花村先輩!」・・・白鐘!?」

「彩さん駄目です、あれは・・・あれは抑えてはいけない!」

　ーー後ろから聞こえる声を無視、自己保存のため、反論を開始。ーー

「〝俺〟は道具だ、代替の利く道具!お前が人間なら・・・

『お前は〝俺〟じゃない』!」

「・・・強情だね、まあいいや。そうだね、『灰原彩は道具である』という命題が真であれば、確かに私はあなたではない・・・」

　ーー言いながら、〝彼〟から〝何か〟が吹き出す。それと同時に足から、いや全身から力が抜けた。ーー

　ーーまるで、〝何か〟が自分から抜き取られるように。ーー

ーー吹き出した〝何か〟が彼にまとわりつく。ーー
ーー全てまとわりついたそこにはーー
ーー巨大な動く人形があった。ーー
ーー黒を基調とする和服に赤い番傘ーー
ーー球体関節をのぞかせた四肢ーー
ーーそしてその顔には、般若の面がついていた。ーー
「我は影、真なる我・・・
なら、私がその命題を覆す。『人は死ぬ』という原則を持って!!」

男の正体～～もしくは新たな相棒～～

そこから先のことを、よくは覚えていない。
そこにいた四人ともが、それぞれ違う〝何か〟を呼び出して、戦っていたこと。
その間、ずっと動く人形と話しあっていたことは覚えている。
・・・どうやらそちらの内容は覚えている様だ。書き出していけば思い出せるかもしれない。
『昔話をしようか、とある男の昔話だ。』人形が話す。
「昔話・・・？」忍者とヒーローを足して2で割ったような〝何か〟を従えたジライヤが返した。
『男は優しく、真面目であった。誰かが喜んでくれることをが嬉しく、不機嫌になることが悲しかった。』
『男は不器用で、口下手だった。男がすることは常にどこかにミスがあり、説明も言葉が足らなかった。』
『男は賢く、弱かった。小学校に入る前には、小学校4年程度の知識を持ち合わせていた。そのかわり、運動は男の弱点となった』
「・・・それがなんだ」黒く、大きく、雷を模した武器を握る〝何か〟を盾にするミカヅチが言った。
『故に、男は狙われた。話の合わず、弱い男は、恰好の獲物だった』
「・・・それって、いじめられたってこと？」頭部がアンテナとなっている女性のような〝何か〟が両手に持つヘッドマウントを被るヒミコが言った。
『その通り、男は虐められた。しかし、周囲は助けることをしなかった。男も周囲に言うことはしなかった。男は優しかった故に。』
「・・・男は優しすぎた、誰も傷つけたくなかった。」機械のようにも、少年のようにも見える〝何か〟に指示を与えながら、スクナが呟いた。
『その通り、ゆえに男は自らを傷つけた。男は辛かった。誰にも言えない痛みを抱え続けた』
「・・・」黙っているのは誰だったか、おそらく誰もが黙っていただろ

う。
『男は思いついた。〈辛いのは、自分に心があるからだ。心のない道具になろう。みんなのために動く、都合のいい道具に〉と。』
「・・・それが今の彼、灰原彩君ですね。」スクナは・・・否、直斗さんは結論付けた。
『その通り、

だから私がいる。』

・・・そうか、あの人形は、押し込まれ鬱屈した『灰原彩という人間』そのものなのか。
心の中に押し込んだ、人間であるという自己意識。
なるほど、先ほどの言葉の意味は分かった。
・・・しかし、その『灰原彩』とはだれなのか。
その時にはわからなかった。
「っ完二君、花村先輩、りせさん。前線をお願いします！」
「おう！」
「よっしゃ！完二、コイツ行動自体は超単調だ、しっかり防ぎながら倒すぞ！」
「花村先輩わたしも行く！ヒミコ、戦闘モードオン！」
三人が動いたのを確認すると、直斗さんは駆け寄り、へたり込んでいた体を抱きしめながら言った。
「彩君・・・灰原彩君、よく聞いてください。あれはあなたの〝シャドウ〟。あなたがずっと抑圧し、目をそらし続けた自分自身。あなたが大嫌いなあなたです。」
つまり、あれは自分自身だと。
「それを踏まえて聞いてください。
・・・あなたはあなたです。他の誰でもない、たった一人しかいない僕の助手です。
代わりはないんです。
道具ではないんです。

機械じゃないんです。
僕の知る灰原彩は・・・
僕の相棒は、あなたしかいないんですよ!!」
代わりはない。
道具でも、機械でもない。
あなたしかいない。

それは、今まで一度も聞いたことがない言葉だった。
そして・・・多分、一番聞きたかった言葉でもあったのだと思う。

「・・・ははは」
思わず笑い声が漏れた。
おそらく、とは言わない。
間違いなく〝俺〟の声だ。
「・・・灰原君?」
そういいながら離れる直斗さんの肩を優しく掴む。
「直斗さん、一つ聞きます。
・・・俺に命令（頼むこと）はありますか?」
そう聞くと直斗さんは少し悩むような顔をした後、合点がいったと
いわんばかりに微笑んで言った。
「いいえ、君に命令（頼む）するようなことはありません」
「じゃあもう一つ」
そういって、一度切ってから、続ける。
「俺に、できることはありますか。」
それを聞いた探偵は、笑顔で返してくれた。
「僕の助手として、一緒に戦ってください。
・・・これからは、人として。」
自分が笑っているのが分かる。
灰原彩という〝人間〟が、ここで生まれたような気分だった。
――――――――――――――――――――――――――
「・・・シャドウの動きが止まった?」

白鐘が後ろに行ったのを確認して、完二とりせと一緒にシャドウを抑えていると。不意にそのシャドウが止まった。
「花村先輩、ありがとうございました。」
警戒しながら距離をはかっていると、後ろから声が掛けられた。
「白鐘?もう終わったのか?灰原さんは?」
「彼ならあちらに。」
驚いて声をかけた白鐘に質問すると、指を指しながら返される。
指された方向に目を向けると、シャドウの目の前に灰原さんがいるじゃないか!
「えっちょ、灰原さん!?」
「待って花村センパイ、様子が変だよ!」
慌てて呼び止めようとすると、いつの間にか戦闘モードをオフにして観察していたーー戦闘モードでも観察はできるけどいろいろ難しいらしいーーりせちーからストップがかかった。
それを聞いて様子を見ていると、急にシャドウから煙が噴き出し、元の状態に戻った。
「シャドウが戻った!?どうなってんだ!!?」
「もともと暴走しきってなかったんですよ。」
「そういや・・・昔話とか、他のシャドウはしなかったな。」
完二と白鐘の会話を聞いて一人ごちる。
昔話なんて他のシャドウはしなかった。せいぜい自分の欲望を吐き出しまくってただけだ。
「当たり前でしょう。」
「うお、あのシャドウ生きてやがる」
「そりゃ生きてますよ、倒されてませんからね」
シャドウが驚いた完二に呆れたように言う、確かにこれはさっきまでの灰原さんのシャドウとおんなじだ。
「暴走しきってないのが当たり前って・・・どういうこと?」
「シャドウとは、本来抑圧された〝感情〟でしかない。
〝感情〟だけじゃ情報量が足りない、だからその〝感情〟を誇張して、視聴者の無意識までかき集めて自分自身の前に現れる。そうしな

いと人としての像を作れないからね。」
　りせちーの質問に、灰原さんのシャドウが懇切丁寧に返す。意外といいやつなのか？
「だけど、私は違う。抑圧したものが大きすぎた、〝俺〟が抑え込んだのは、人間であるという意識、人格とかに言い換えてもいい物だ。」
「だから、〝君〟は暴走しきらなかった。人としての像を作れる情報量があったから、誇張する必要がなかったから。」
「・・・誇張ってのは、変な風に膨らませるやつだろ？なんでそれがしていないと暴走しないんだ？」
　二人の灰原さんの会話に完二が質問する。確かに、それがどうしてもとに戻ることに繋がるんだ？
「「完全否定されないから。」」
　その答えは二人の灰原さんと、白鐘が揃って答えた。
「・・・直斗さん、分かってたんだ。」
「そうですね、彩君。
　僕はあの事件のあと、シャドウの意味について考えました。行きついたのが〝シャドウは抑圧された自分を受け入れてほしいから現れる〟という結論です。」
　確かに、それは分かるかもしれない。
　俺らのシャドウは、受け入れられた時が、一番嬉しそうだった。
「逆に言えば、受け入れられるために現れるんです。それが否定されると・・・」
「シャドウにはそれ以外にない、だから存在が完全否定される。八つ当たりもしたくなるってもんだね。」
　白鐘の言葉に本物の灰原さんがこたえる。っていうか、灰原さん口調変わってね？
「その点、〝君〟は違う、〝君〟は俺が抑えたまま育った別人格。体がないだけで、俺とほとんど変わらないんでしょ？なら、否定されても、〝君〟が残るだけだ。」
「そういうこと」
　・・・二人の灰原さんの会話でなんとなくわかった、気がする

俺たちのシャドウと違って、灰原さんのシャドウはもはや違う人間なんだ。
「・・・さて、そろそろ喋り疲れたかな。ねえ〝俺〟」
「・・・あぁ、終わりにしようか。〝君〟の」
灰原さんのシャドウと灰原さんが声をかけあうと。お互いに右手を出して握りしめた。
「俺は人間、灰原彩だ。
君も人間、灰原彩だ。
ゆえに・・・
『お前は、俺だ』。」
「・・・分かりづらい。けど、うん。その通り。」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
俺の人間宣言を聞き入れ、俺のシャドウは光に包まれた。
その光が一層大きくなると。先ほどの巨大な人形ーー俺の暴走シャドウ、だったらしいーーとよく似た人形が現れた。
球体関節は同じ、しかしその和服は白が基調に、傘が藍色の唐傘になっており、顔の般若面が外れていた。その顔は長い髪に隠れて見えなくなっている。
『我は汝、汝は我』
静かな男の声が聞こえる。その声は、この人形・・・俺のペルソナからの声だと、なぜか確信した。
『我は人より生まれ、道具より生まれ直せし生命〝カラカサ〟なり。
・・・自分が人間だということ、もう二度と忘れないでね。』
もう一人の自分からの最後のエールに答えるように言う。
「こんな生まれ方、忘れられるわけがないよ、カラカサ。」

浮遊城の主～もしくは時知らぬ子供～

「まさかこのようなことになるとはね。」
俺のペルソナ『カラカサ』が消え、周囲の霧が何時の間にか晴れたーーよく見ると、そこは塔の屋上のような場所だったーーことを確認していると、唐突に聞き覚えのない声が聞こえた。振り向いた先には、白衣を着た学者のような男がそこにいた。
「いや、これが本来の形なのかもしれないな・・・なんにせよ、君達を危険にさらしたことを謝ろう、すまなかった。」
男はそう言って頭を下げる。
顔を上げた男の顔を俺は覚えていた。
その男は茅場明彦、ＳＡＯの製作者、つまりＳＡＯ事件の黒幕である。
「茅場明彦・・・!?なんでこんなところにいるんだ?」
思わずそういうと、茅場は頷いた。
「正確に言えば、私は茅場明彦本人ではない、茅場明彦の人格を持つＡＩだ。
ソードアートオンラインの終了時、私は脳波スキャンを行い、人格と知識をＡＩに落とし込んでいる。私がここにいるということは、現実の私は死んでいるだろう。人間で耐えきれる強さではなかったからね。」
「・・・このマヨナカオンラインは、あなたが仕組んだものなんですか?」
当然のように自分の死を語った茅場に、直斗さんが質問した。
「そうとも言えるし、そうとも言えないともいえるね、おそらくこのマヨナカオンラインは、今からおおよそ3年前、ＳＡＯ開発の時点で発生していたものを再利用したものだろう。」
「三年前って・・・マヨナカテレビの前かよ!?」
「その年って無気力症の騒ぎが収まった年じゃなかったっけ?」
「ええ・・・そして、影時間が終わった年でもあります。」
茅場明彦の答えにジライヤーーー花村さんーーが驚き、ヒミコーー

久慈川さんーーが思い出し、そして直斗さんが結論を付ける。
その結論を聞き、茅場は驚いたような顔をして言う。
「影時間・・・緑の月が上る時間のことを知っているのか？」
「・・・伝聞でのみですが。３年前、一日と一日の間にあった時間のことですよね。」
直斗さんの話は少し聞いたことがある。３年前まで、一日は２４時間ではなかった、それを知っているのは、その時点でペルソナを使う適正があった人間のみだという。
「それなら話が速い。私は君達が影時間と呼ぶ時間を過ごしていた。」
「マジかよ・・・！」
茅場のカミングアウトに驚いたミカヅチの言葉は、その場にいた茅場以外の全員の内心を示していた。
「私にとっては考える事に使える時間が増えただけだったがね。本題はこれからだ。
〝マヨナカオンライン〟は、先ほども言った通りＳＡＯを開発している時、ある影時間の後に発生していた原因不明のバグだ。」
「・・・？バグが原因不明ってどういうことです？ゲーム・・・いやプログラムにおけるバグって、故意にしろ偶然にしろ人為的なミスでしょ？キチンと調査すれば修正できるんじゃ・・・。」
俺が思わずしたその指摘に対し、茅場は表情を変えずに言った。
「そもそも作った覚えが無いんだ。ＳＡＯのプログラムとして何時の間にか存在していた。消去もできない状態でね。」
「えぇ・・・」
つまり勝手にできたプログラムだったということだ。ありえない、なんて思うのは俺だけだろうか。
「仕方なく私は、そのプログラムを直接圧縮し、封印することにした。」
「あ・・・あっしゅく？」
「巽君、圧縮というのは、プログラムが動かない状態に書き換えておくことです。」
「お、おぅ。サンキュー直斗」
茅場の説明に直斗さんが補足をする。

ちなみに、圧縮ソフトを利用すると、元のプログラムと圧縮したプログラムの二つが出来るはずである。
・・・今の発言だと、茅場は正体不明のプログラムを直接圧縮した状態まで書き換えてる事になる。ほんとになんなんだこの人。
「その後、そのデータを残したままＳＡＯを起動、２年前に空の城が出来あがった。」
「待ってくれ。・・・そのＳＡＯで封印した奴が、なんで今になって現れたんだ？」
「花村先輩。このＡＬＯは、ＳＡＯのコピーサーバーで出来上がっています。」
花村さんの質問は、直斗さんの補足ではっきりとした。
サーバーのコピーは簡単にはすることが出来ない。はっきり言えばデータが大きすぎるのだ。
少しずつコピーしては時間がかかりすぎるそれを短時間で終わらせるために、データの意味を書き換えずに、ギリギリまで大きさを小さくする技術を。
エンジニアは圧縮と呼んでいる。
「そう、このサーバーはＳＡＯのコピーだ、おそらく、いくつかの圧縮データにしてコピーし、それを別のサーバーで解凍・・・元の状態に戻したんだろう。」
「その時に混じったってこと・・・！」
茅場の解答に、久慈川さんが言う。
つまり、解凍の際にマヨナカオンラインの封印を解いてしまったのだ。
「そして今回、ＡＬＯにいた私がマヨナカオンラインの起動を感知しここにやってきたというわけだ。何か質問はあるかい？」
茅場の言葉に俺は手を上げた。
「ＡＬＯにいた・・・てのは、なんか用があったってことです？」
「いや、プログラムとして覚醒したのが先ほど、このサーバーでだったというだけだ。先ほどキリト君の手助けをしてきた帰りでね。」
「キリト君・・・というかアスナさんは大丈夫なんですか？」

「問題ない、先ほどキリト君、アスナ君のＡＬＯからのログアウトを確認した。二人は無事だ。」
　俺の質問に返した茅場の言葉に直斗さんが質問した。
そして帰ってきた答えを聞き、探偵は深くうなずく。
　この時点で、探偵の仕事はすでに完了した。
「君達も帰るといい、私の権限で君達をログアウトしよう。」
「待ってください。」
　茅場が言うとともに手元にメニューウィンドウを呼び出し操作しようとするのを、直斗さんが止める。
「このマヨナカオンラインはどうなりますか?同じような事故が起きる可能性も・・・」
「問題ない、ここは私が責任をもって処理しよう。プログラム上からは削除できなかったが、空間内から直接手を加えられるのなら話は別だ。」
「そうですか・・・分かりました。」
　直斗さんが茅場の答えに納得をーー若干渋々といったようにーーすると、茅場はその手にあるウィンドウを操作する。
「それでは、ログアウトだ、こちらの事は任せたまえ。」
　ーー行くぞ、ピーター・パン」
　強制的なログアウトの感覚の中、そんな声が聞こえた気がした。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　現実でのソファで意識を目覚めた俺はアミュスフィアを頭から外して起き上がった。
「彩君、すぐに出かけますよ。車を出してください」
　同じく椅子に座った状態でアミュスフィアを机に置いた直斗さんは立ちながら言った。
「ん、分かりました、どこ行くんですか?」
「病院です、明日奈さんのいる。」
　俺もテーブルにアミュスフィアを置き、テーブルの上の車のキーを掴む。
　事務所を出ると、月のない夜空から雪が降っていた。

運転席に乗り込み各機種の動作を確かめた後、直斗さんが助手席に乗ったのを確認して車を発進させる。
「・・・で、なんで今から向かうんです？べつに明日でもいいでしょうに」
「明日ではダメなんです、須郷信之がもう病院に向かっている可能性があります。」
「マジすか」
赤信号に引っ掛かったタイミングで直斗さんに聞けば、それは未来予知とも思える返答となって帰ってきた。
信号が青に変わったのを確認し、車を走らせながら続ける。
「・・・なんでそう思ったんです？」
「昨日追跡した高田太郎さんを覚えていますか」
「地下駐車場に白鐘探偵が乗り込んでいったやつ時のですよね。須郷信之とつながってたっていう」
「そうです。彼と須郷の会話の中に、外国への不正渡航を示唆するものがありました。」
「・・・実験が終わったら、もしくは都合が悪くなったら高飛びする気だったと。」
「その通りです。」
「それと病院に向かうのが何の関係が？」
「・・・彼女を一人だけログアウト出来ない状態にした彼が、一度手放した程度で素直にあきらめるとも思えないから、ですね。」
「・・・もしかして、さっきあの人が叫んでいたログアウト出来ていない一人って・・・！」
「十中八九、明日奈さんのことでしょう。そして彼のことだ、明日奈さんを拉致して高飛びをする可能性も捨てきれない。」
直斗さんはノートＰＣを繰りながら言う。
「もしそうなった場合、依頼の達成どころの話ではなくなります。そうなることは防ぎたい。」
「それで病院へ、ですか。分かりました、一気に向かいましょう」
言いながらアクセルを軽く踏み込むと、直斗さんは少し強い口調で

言った。
「制限速度は守ってくださいよ。・・・僕たちがつかまっては意味が無いですからね。」

病院前にて～もしくは、最後の戦い～

「・・・何してるんです直斗さん」

病院の前で車を留める場所を探していると――病院はすでに受付時間を終えていて、正面の門が閉じられていた――隣からガサゴソと音が聞こえ始めたのを感じ、手持ちカバンから鳴らしているであろう白鐘探偵に声をかける。

「急に引っ張り出したので荷物の整理が・・・っと、あったあった。」

探偵がそういいながら手持ちカバンの中からカメラを取り出したを横目で見て、街灯の下で交差点の有無を確認してから車を止めた。

「カメラですか、それでいったい何を？」

「もちろん、彼の証拠を手に入れるんです。」

言いながら探偵が車を降りる。俺もそれについていくように車を降りて、探偵が病院の門へと歩いていくのを追いかけた。

どうやら職員用の通用口らしい開いていた門を抜けると、そのまま駐車場に身を潜めた。わずかに残る車を遮蔽に通用口と玄関を警戒していると、白鐘探偵は今回の計画を確認始めた。

「目的は須郷信之の身柄を確保し、明日奈さんを保護することです。ただし、僕たちは令状を持っていません」

「そもそも警察じゃないですしね、どうすんですか。」

「現行犯逮捕してもらいます。」

現行犯逮捕、と俺が聞き返すと白鐘探偵は頷いた。

「簡単に言えば傷害罪を適用させます。

この病院の規模なら警備員が常駐しているでしょう。そこで私たちを須郷信之に襲わせて、警備員に止めてもらいます。」

何というマッチポンプ・・・いや、違うか。

そんなことを考えながら警戒を続けていると通用口から入ってくる自転車を見つけた。

「！直斗さん、通用口、自転車・・・和人君ですね」

「桐ケ谷君？」

俺の箇条書きな言葉を聞いて白鐘探偵が目線を向けると、そこにい

た黒装束の青年、桐ケ谷君を見て言った。
「どうやら向こうも成功したのは本当のようですね。明日奈さんに会いたくていてもたってもいられなかったんでしょう。」
「直斗さんもそういうことあるんです?」
「・・・」
「いたいたい、脇腹殴らないでください。」
そんなことを言い合いながらーー一方的に殴られながらーーー和人君が玄関に向けて走っていくのを見送っていると、車の影から人影が現れ・・・

持っていた〝何か〟で和人君を切りつけた。

「・・・!!彩君!」
「了解!」
白鐘探偵の号令に合わせて突撃する。その人影を吹き飛ばすようにタックルを当てて体制を崩し、和人君との間に入る。
「大丈夫ですか!?」
「あ、ああ・・・あんたは、探偵の・・・?」
和人君と彼に駆け寄った白鐘探偵の会話を後ろに聞きながら、目の前の男に警戒する。その顔は数日前、ダークグレーのスーツに身を包んでいたのを見かけた顔だった。眼鏡の奥にあった人好きのする笑顔は面影もなく、その目は狂気に見開かれている、その右手には大振りのナイフがネクタイで括りつけられていた。どうやらそのまま和人君を切りつけた様だ、握力が失われているらしい。
「何だいキミ・・・邪魔なんだけど。」
「邪魔しに来たんだからねぇ・・・直斗さん、この人俺たちよりも早く隠れてたみたいです。」
「そのようですね。」
須郷の言葉に返しながら、白鐘探偵に声をかける。探偵の返しを聞いて、桐ケ谷君の目が見開かれた。
「隠れてた・・・?」

「キリトくん、先に行ってください。ここは僕たちが引き受けます」
「あんだけの人数集めて手に入れた勝利だ。ここで落とすなんてしたくないでしょ？」
「・・・アンタらもしかして・・・！わかった。」
　和人君に先を進むよう促すと、彼は何かを察してから玄関に向かう。和人君が須郷を避けるように遠回りに動くと、須郷がそれに照準を合わせるように顔を向けた。
「逃がさないｙ「のはこっちの方なんだよね」・・邪魔だ！」
　そのまま彼を襲おうとする須郷の前に入り込むと、振り払うようにナイフが振られる。
　それを左腕で受けながら後ろに下がると、腕から大きく血が噴き出した。
「あっぶな、下がってなかったら動かなくなるとこだった。」
　左手を握ったり開いたりして調子を確認しながら須郷の間合を再確認する。
「ぼくの邪魔をするなよクズが、お前らみたいな全てにおいて劣ったクズが、この僕の足を引っ張りやがって「全てにおいて劣ったクズを」・・・あ〝っ？」
「全てにおいて劣ったクズをたったひと振りで殺せないんだ。」
「なにいって「それってさぁ」人の話を・・・」
「お前の方が俺より劣ってるってことだよな？俺はお前のこと、一発で殺せるぜ？」
「・・お前、何言ってんだ？お前みたいなもやしが出来るわけないじゃんそんなこと。」
「人を見かけで判断しない方がいいと思うよ？」
「お前みたいなクズが何言ったてさァ。結局！ぼくの邪魔していることにかわりはないんだよ！ぼくの邪魔する奴はさァ・・・」
　度重なる挑発で完全に頭に血が上った須郷が突撃する、その瞬間に体を前に倒して少し駆け出す。
「死ねぇ！」
「やだ」

ナイフを突き出した須郷の足の間に足を滑らせる。体を大きくそらして後ろに倒し、両足をついてブレーキを掛けると、須郷が足を引っかけてこちらに倒れこんだ。
そのまま俺の体に跨った須郷は、好機を得たといわんばかりに右手のナイフを俺の右目につきこんでくる。俺がその右手首を右手で掴んで、そのまま力の比べ合いに持ち込む。
「なんだいなんだい、大口叩いておいてこの体たらくかい、こんなんじゃぼくを倒すなん出来やしないよ」
圧倒的に自分優位の立ち位置を得て上機嫌な須郷が嘲るようにいう。確かにこの状況は向こう有利だ、右手がまともじゃないにしろ、向こうが両手が使えて、しかも重力の補助がある。こっちは右手しか使えないが、さっきの左腕の傷が痛んで動きづらい。この状態では数分もしないうちに俺の右目はくり抜かれるだろう。
・・・だからこそ。
「そこで何をしている！」
警備員に言い逃れはできない。
ちょうど巡回していたのだろう、思ったよりも早い到着の警備員が懐中電灯で照らしたのは
『左腕を怪我した男がナイフを持った男にマウントを取られて右目を刺されそうになっている』
姿だ。
「はい、即死っと。」
誰にも聞こえないような声で、呟く。
俺はたった一度のスライディングで、須郷信之を社会的に殺すことに成功した。
「てめぇぇぇぇぇぇ!!」
須郷が叫びながら力を込めるが、目に刺さる前に警備員に取り押さえられる。
「この左腕のやつ、この男にやられました。」
起き上がりながら警備員に申告すれば、警備員は須郷を取り押さえた腕の力を強めて言った。

「キミ、危ないところだったね。この男のことは俺に任せてもらっていいよ。今、怪我をした少年がいるらしいから一緒に処置してもらうといい。」
「そうします。ありがとうございました。」
俺がそう言って頭を下げると、警備員は須郷を抑えたままその場を離れていった。警察に引き渡すのだろう。
「彩君」
「なんですか？」
後ろからかけられた声に振り向くと、腹部に強い衝撃が走った。何事かとそこを見ると、白鐘探偵が俺の左腕を触っていた。
「・・・どうやら大事にはなっていませんね。よかった・・・。」
どうやら触診していたらしいそれを終えると、その状態のまま安心したように言った後、こちらをにらみつけた。
「な、直斗さん？」
「彩君、向こうで言いましたよね。僕の相棒はあなたしかいないと。僕に相棒を失わせる気ですか？」
あ、やばい普通に怒ってる。とりあえず何かで話をそらそう
「直斗さん、いいんですか？」
「何がですか？」
「さっきから俺の体に抱き着いてますけど」
「・・・？・・・!!」
不意に直斗さんの顔が赤くなり離れたと思えば、
俺の視界が左に大きく吹っ飛ばされた。
どうやら左腕のほかに、右頬の紅葉も治療してもらう必要があるようだ。

幸せな終わり～もしくは新たな始まり～1

その後を書くに当たって、無意味に最初に立ち返ろう。
さて、
あの後、事務所に戻ってからお互いに帰宅。次の日、結城彰三さんと連絡を取り、彼と病院前で待ち合わせて明日奈さんの病室へと向かった。
病室に入り、彰三さんに紹介されると、ベットに体を横たえていた明日奈さんはこちらを見てはにかみながら、まだ声を出しづらいであろう喉で言った。
「ありがとう、ございます。」
「いっいえ、依頼ですから。無事で何よりです。」
「人の好意は素直に受け取った方がいいですよ～。そんなんだから〝あの人〟に思いを伝えられ中指がねじれるように痛い!?」
「余計な事を言わないでください!」
赤面する女子高生に中指をひねられるという新感覚の痛みを味わっていると、病室のドアーーちょうど真後ろで、のけぞった際に見えたーーが不意に動いた。
「アスナーきたぞ・・・って、あんた達は・・・。」
入ってきたのは、改めて見舞いに来た和人君だった。彼に気付いた彰三さんが声をかけた。
「和人君、見舞いに来てくれたんだね。」
「えっええ。」
実際には昨日も来たんだが・・・とは言えるわけもなくただ応答を返す和人君を見て、彼は安心したように続ける
「ははっありがとう。それじゃあ私はそろそろ行くよ、いろいろ残してきてしまったんでね。」
彰三さんはそういって、もう一度明日奈さんにゆっくり治すことを言ってから、病室を出ていった。
「三日ぶり、いえ昨日ぶりですねキリト君」
彰三さんを見送った後、直斗さんが言うと、二人がそれぞれの反応

を示した
「・・・！」と急に声が出せずに、驚いた顔をする明日奈さんと
「やっぱり、知ってたんだな。」と納得した顔の和人君だ。
「あの名前を聞いた時に分かりました」直斗さんが続ける「ＡＬＯの中で堂々と名乗ってましたよね。」
「あぁ、あのときか」
「お二人さーん、当事者が置いてけぼりですよ～」
俺の声に二人が、横で寝ている明日奈さんが固まっていることに気付き、事情を説明。それを聞いた明日奈さんは、もう一度、お礼を言った
「ありがとう、ございます。キリト君を、助けてくれて・・・！」
・・・その後、二人で何を話していたのかは知らない。あとは二人の方がいいだろうと、直斗さんと共にその場を去ったからだ。

皐月の休日、俺と直斗さんは徒歩でとあるところに向かっていた。
あの後、逮捕された須郷信之は、事件におけるあらゆることに対して黙秘、否認を繰り返していたが、直斗さんが保護をーー用意をーー頼んでいた〝重要参考人〟がそのすべてを証言、信頼できる筋からーーつまりは菊岡さんからーー証拠として挙げられた『研究資料』がレクトプログレス内のサーバーと一致し、言い逃れが出来なくなった。そこから人が変わったかのように自供、自責の念に押しつぶされるように法廷で泣き崩れたと聞いている。
実験場所となったＡＬＯ、およびその運営会社、レクトプログレスは壊滅的な打撃を受けた。否、打撃を受けたのはＶＲＭＭＯと呼ばれるジャンル全てだ。元々ＳＡＯ事件で作り上げられてた不安感が、『今度こそ安全！』と銘打たれたゲームでの非人道的実験によって爆発する形だった。
結果、ＡＬＯはサービスを終了し、レクトプログレスは解散、レクトの本社は経営陣の刷新によって危機を逃れる形となったようだ。
また、昏睡状態を回復した３００人を含むＳＡＯ帰還者のうち、当

時中学、高校生であった人物には、廃校を利用して作った臨時学校ーー帰還者のメンタルヘルス施設、兼近未来のモデルスクール。らしいーーに通って、かつての学生生活に戻ろうとしているらしい。こまめに病院に様子を見に行っていた直斗さんと交流が深まった明日奈さん、和人君両名からの情報だ。
「しっかし、３００人に後遺症が無くてよかったですね。あったらどうなってたいたか。」
「全くです。覚醒状態での実験だったようですから、どうなってもおかしくなかった。記憶が消えていて助かった。」
「・・・なんで実験の内容知ってますん？」
「ある程度目を通しましたからね・・・おや？」
　道すがらそんなことを話していると、前の方に上下、髪まで真っ黒の青年と、青年と同じ色を短く切りそろえた少女、栗色の髪が腰まで伸びている少女が並んで歩いているのを見つけた。
「和人君と桐ケ谷さん、それに結城さんですね。恋人は仲が良くていいですね直斗さん」
「なんでそれを僕に言うんですか・・・」
「なんだあんた達か・・・」
　どうやら俺らの会話に気付いたらしい和人君が後ろを振り向くと、他の二人も足を止めて振り向いた。どうせ目的地は一緒だろうしこれ幸いと合流させてもらう
「こんにちは桐ケ谷君、明日奈さん。それと・・・」
「始めまして、兄がいつもお世話になってます。妹の桐ケ谷直葉です。」
「探偵の白鐘直斗です。こちらは助手の灰原彩君」
「どうも、〝灰色の原っぱを彩る〟と書いて灰原彩。結城さんが起きないのを心配していた男です。」
「ん～っと・・・あぁ、あの時の。」
「彩君、知ってたんですか？」
「直斗さんがお見舞いに行かせた時にちょっと」
　と黒髪の少女ーー桐ケ谷さんーーと既知の自己紹介というちょっ

とよくわからない状態になっていると、和人君が桐ケ谷さんの肩をポンと叩きながら言った。
「スグには、〝スクナ〟と〝ツクモ〟っていった方が分かりやすいかもな、白鐘さん、コイツが〝リーファ〟です。」
「〝スクナ〟と〝ツクモ〟ってええ!?あの時の!?」
「あぁ、あなたがリーファさんだったんですね。はい、ＡＬＯでスクナと名乗っていました。」
「〝ツクモ〟は俺です・・・まあアカウント消えちゃったんですけど」
「え、アカウントが消えた・・・？何をしたんですか・・・」
「事故みたいなもんですかねぇ・・・」
　返答しながら頭をかく。事故は事故でも故意の事故であったため、口に出しづらい。
　アカウントが消えた・・・つまりはアカウント抹消（BAN）処理を食らった理由は、間違いなくあのハッキング用ゲームカードである。
　とあるハッカー組織の重鎮（それ以上のことを直斗さんが教えてくれなかった。）のバックドア（ハッキング用アクセス経路）として機能させるプログラムが仕込まれたゲームカードを突っ込んでプレイしたあの日を境に、俺のアミュスフィアはＡＬＯを受け付けなくなった。どうやらアカウントＢＡＮのペナルティとして、三か月はＡＬＯに参加できないようになったようだ。もちろんアカウントに紐づけされたキャラクター〝ツクモ〟も抹消され、もし次があるならまた1から始めなければならない。
「まあたいして気になりません、いろいろ吹っ切れましたし。」
「そ、そうなんだ・・・」
「ほ、本日は！お招きいただいてありがとうございます。」
「あ、あぁ、いやそんなかしこまらなくてもいいぞ。身内の集まりみたいなもんだし」
「そうですよ、ホームパーティでかしこまる必要もないでしょう？時間もありますしさっさと行きましょう。」
　少々しゃべりすぎたかと感じつつ直斗さんのムリヤリな軌道修正に乗って話題を変え、足を進める。三人が前も向いたあたりで静かにふくらはぎを蹴られた。だから痛いんですよあなたの蹴り。言い過

ぎかけたのは俺なんで甘んじて受けますけど。
　そのあと、高校生たちの華やかな会話（直斗さんは今年で高校３年生だそして俺は、留年して大学二年をやり直している）を聞きながら歩いていると、目的地の〈ダイシー・カフェ〉までたどり着いた。アンドリューさんの経営するカフェのドアには〈ＣＬＯＳＥ〉の看板に『本日貸し切り！』
　と書かれた紙が張り付けられていた。その貸切られたカフェの扉を開けようとすると、不意に探偵に手を引き戻される。
「んおっと・・・直斗さん？」
「どうしたんだ白鐘さん？」
「いえ、ちょっと気になることが」
　思わずといった感じで声をかけた俺と和人君に答えながら、俺の手を掴んだまま店の外観を見るように離れ、俺にだけ分かるように何か指さした。さされた方法に目を向けると、
　カフェの中にいる人全員がクラッカーを構えてドアの前で待機しているのが見えた。
「あぁ、なるほど・・・。三人とも、先に入ってて大丈夫ですよ！」
「そうなのか？じゃあ遠慮なく・・・」
　向こうが何をやりたいのかを察した俺は三人に、正確には和人君と結城さんに先に行ってドアを開けてもらうようにいう。
　それを受け取ってドアを開けた和人君を
「「キリト、ＳＡＯクリアおめでとう!!」」
　大量の紙吹雪と祝福の声が覆った

幸せな終わり～もしくは新たな始まり～2

「マスター、甘いカクテルくださいな」
「お、今日は飲むのか、珍しいな」
「イベントごとぐらいでしか飲む暇ないもんで。まあ未成年も多いし、カウンターでこっそりとですけど。」
　そのあと、ネタばらしーーどうやら〝ＳＡＯクリアオフ会〟に〝キリトを驚かせよう作戦〟が組み合わされていたらしいーーの後、和人君のタジタジの音頭を合図にオフ会が始まった。
「ふーん、キリトと一緒にアスナを助けに、ねぇ。」
「そうなります。彼とは助ける理由が違うだけでしたね」
「それで？なんかなかったの？」
「・・・？なんか、ですか？」
「どうせキリトのことだからなんかあったんでしょ？アイツが急にすっころんで・・・そのたわわな胸部装甲を鷲掴みにされたとかさぁ？」
「ちょ、里香さん。初対面の人にそんな・・・」
「そ、そんなことありませんよ！ＡＬＯのアバターでは比較的スレンダーな方ですから！」
「え、アバターって自分そっくりじゃないんですか？」
「え？」
「え」
「え」
「なんか向こうが面白いことになってんすけど」
「ＳＡＯ内でアバターが機能してたのはほんの数時間。あとは全部現実のソレだったからな。カルーアミルクできたぞ。」
　直斗さんはテーブルでそばかす顔の女子とツインテールの女の子と会話している。しているうちに謎のすれ違いが起こっているようだが。
　ちなみに直人さん、あなたのアバターは〝あなたが見たなかで比較的〟スレンダーなのであって周囲から見ると十分たわわです。

「つっかれた・・・」
「和人君クッタクタだな、どうした」
「背中バンバン叩かれたり尊敬のまなざしで見つめられたりしてキツかった」
「あぁ、うん、そいつはお疲れさまだ」
「レイドボスよりきついかもしれない・・・エギル、バーボン、ロックで」
「・・・酒の注文は冗談だけにしときな高校生」
「ほらよ」
「なん・・・だと・・・!?」
アンドリューさんーーーＳＡＯでは『エギル』だったらしいーーーが俺らの冗談をよそにグラスに丸い氷の浮かぶ茶色い液体を差し出す。雰囲気がすでにアルコールである。
未成年飲酒。ダメ、絶対。
「ってこれウーロン茶かよ」
出されたソレを和人君が恐る恐る口に入れると、拍子抜けするような声で言った
「未成年に酒なんか出すかよ」
「アンドリューさんビックリするからやめてそういうの。」
どうやらおちゃめなマスターの冗談返しだったらしい。ほんとにやめてほしい。
「エギル、俺には本物をくれ」
言いながら、和人君の隣ーー俺とは逆側ーーのスツールに一人の男が座る。
ワイシャツとネクタイにスラックスといったサラリーマンの風体をした、茶髪を上げる赤いバンダナが印象的な男性だ。
「初めて見る顔だな、壺井遼太郎だ。〝向こう〟じゃ『クライン』って名前だった。」
「そりゃあ初めて見ますよ、〝向こう〟に行ってないですからね。
白鐘探偵事務所で助手をしています、灰原彩です。」
「おっと、んじゃあアスナさんを助けてくれたってことか、俺からも礼

を言わせてもらうぜ。アスナさんがいなけりゃこいつがショボくれたまんまだったからな！」
「うるせえよクライン・・・おまえこのあと仕事あんだろ、飲んで大丈夫なのかよ」
「へへ、残業なんざ飲まなきゃやってらんねえよ。」
　言いながらアンドリューさんから丸い氷の浮かぶバーボンを受け取るとスツールを回す。その先にいたのは先ほどまで謎の混線を起こしていた女子高生たちだ（直斗さんはあれでも高校三年生の１８歳・・・明日奈さんと同い年だ）。
　あの後明日奈さんが説明に入ったらしく、今は仲良く談笑している。あのＫＹ探偵が同年代の人と混ざって笑っているとは珍しい。
「いやぁそれにしても・・・いいねえ。」
「未成年に手ぇ出したら後が怖いですよ。女性の体は１５、６で子供作れますから」
「するかよんなこと!!」
「クラインのことだ、出しても不思議じゃないな」
「てめえキリト！俺のことどんな風にみてやがんだ！」
「女に飢えてる」
「いや灰原さんには聞いてねぇ！あとエギル笑うな！」

「いやぁ、キリトくんの周りは退屈しなさそうだね」
　壺井さんの独り言に茶々を入れ、始まった和人君との口喧嘩を横目にカルーアミルクで口を潤していると、俺の隣ーーー和人君とは逆の位置ーーーに男が座った。いい値段のしそうなスーツをばっちりと決め、できるビジネスマンのような姿をしている。男性は俺に顔を向けると話し出す。
「始めまして、『シンカー』といいます。『ＭＭＯトゥデイ』というＭＭＯ専門ニュースサイトの運営をしています。」
「・・・それ、アバターネームでは？灰原彩、探偵助手です。」
「シンカーさん、お久しぶりです。そういえばユリエールさんと入籍したそうですね。」

「おっとそいつはおめでたい、おめでとうございます。」
　口喧嘩の途中でシンカーさんに気付いた和人君が声をかけ、それに便乗するように祝福する。彼はそんな祝福に照れたように笑い、現実に慣れるのに精いっぱいだとこぼした。
「そういえば、ネットで話題になってましたね、新生ＭＭＯトゥデイ。なんでも2年ほど前から休止していたとか。」
「私が動けない状態でしたからね、新生と言われてもお恥ずかしい、コンテンツも情報も少なくて・・・」
「まさしく宇宙誕生の混沌って感じだからな」
　シンカーさんの嘆きをアンドリューさんが拾う。それを聞いた和人君がその身をカウンターから乗り出した
「エギル、どうだ？『種』の方は」
「すげえもんさ、ミラーサーバー含めてダウンロード総数１０万、実際稼働中の大規模サーバーが３００ってところだな」
「種？」と俺が会話をしていた二人に質問すると。キリトが呆れたように笑っていった
「文字通り種だよ・・・ＶＲＭＭＯのな」
「・・・じゃあ何だよ、ＡＬＯってサービス復活してたのかよ・・・。くっそ最近他の事件にかかりきりだったからな・・・」
「おう、ベンチャー企業がデータ買い取って、飛行時間の制限をとっぱらって、世界樹の上に街一個乗っけてな。」
　その後、和人君とアンドリューさんから『種』こと『ザ・シード』の詳細を聞き、二杯目の酒ーー今度は赤ワインとカシスリキュールのカクテルーーを手に愚痴ることにした。
『ザ・シード』とは、簡単に言えばＶＲＭＭＯのパッケージソフトらしい。これと、サーバーとケーブル、そして３Ｄオブジェクトを揃えれば、それだけで一つゲームを作れるらしい。彼はそのソフトを完全フリーで配布することにしたらしく、今もどこかで世界が作られていてもおかしくないそうだ。
「教育や観光にも使われているみたいだな。あんだけリアルな世界だ、無理ねえか」

「私たちはいま、ＭＭＯＲＰＧを超えた新たな世界の創成に立ち会っているんです・・・私もサイト名を変えようと思ったんですが、これといったものが無くて」
手元から取り出した端末で調べていた壺井さんに続けて、シンカーさんがぼやく。
確かに、ここまで行くとＭＭＯだけではくくれないだろう。フルダイブＶＲそのものを示す新たな言葉が必要になるかもしれない。
・・・まあ、そこまで考える必要もないか。そういうのは頭の良い人か大衆心理に任せよう。
そんなことより、ＭＭＯトゥデイの新たなサイト名だ。
「名前か・・う～む「ギルド名『風林火山』なやつのセンスなんて誰も期待してないよ。」なんだと！新生風林火山にはな・・・」
「それで、何か案はありますか？」
また騒ぎ出した二人をよそにシンカーさんが尋ねてきた。といわれても、俺もアイデアがすぐに出るわけじゃない。
少し考えながらグラスを見つめていると、ふと一つだけ思い浮かぶ。
「・・・『カーディナル』とかどうですか？いや、今飲んでるカクテルの名前言っただけですけど。」

ＨａｐｐｙＥｎｄ～ａｎｄＮｅｗＧａｍｅ～

「イィヤッホウウウウウウウウ!!」
久しぶりの大空に自然と叫び声を出していた。
あの後、二次会を〝ＡＬＯ〟の中でやると知った俺達は急いで戻った後、規制の解けたＡＬＯを自分のアミュスフィアに差し込んだ。
２度目のアカウント作成も勝手知ったるチュートリアルも爆速で飛ばし、レプラコーン領から全速でアルンまで向かう。エリア東部の〝虹の谷〟～～アルンに向かう四本の道の一つ～～でわざわざ待ってくれたスクナさんと、先に話を聞いていたらしいジライヤとミカヅチと合流し、無制限となった羽を全力で飛ばして楽しんでいた。
「テンションたけぇ・・・」
「ミカヅチ、お前も最初あんな感じだったぞ」
「あれが本来の彼なのかもしれませんね」
後ろから聞こえてくるミカヅチ、ジライヤとスクナさんの声を聴き、そこにいない人物について聞く。
「そういえばヒミコさんは来ないのか？仕事中？」
「いえ、仕事はもう終わったようですが・・・」
質問のために速度を落とした俺に追いついたスクナさんが、苦笑交じりに続けた。
「『むり　つかれた　ねる』とメールが来ました。」
「まさかの三語、めっちゃ疲れてるのがありありとわかる。」
「さすがのりせちー・・・ってか。」
「あいついっつも忙しいっすね」
「人気アイドルですからね、ゆっくり休んでほしいところです。
そろそろアルンにつきますよ。」
スクナさんの声に前に目を向けると、半年前にたどり着いた町が見えた。
「あそこの上ですよね。」
「はい、世界樹の上の町『ユグドラシルシティ』の広場がまちあわせ場所です」

「それじゃあさっそｋ「世界樹の内部を通りますよ、そちらのエレベータの方が近い」アッハイ・・・」
　急上昇で向かおうとしたらスクナさんに釘をさされた。げせぬ
「そういえばよ」
　そのままアルンの大通りをゆっくり歩いていると、不意にミカヅチが声をあげた。
「結局、二次会って何すんだ？メシは食ってきたんだろ？」
「お前、何も聞いてないのかよ。」
「仕方ないじゃないっすか！あんのババア、自由登校になった途端に本腰入れやがって。」
「自分の親をババア呼ばわりはいかんよ。」
「別になんだっていいじゃないっスか、あれ、あんたって俺の実家知ってたんスか？」
「いや、話ずらすな」
　頑張って軌道修正をかけるジライヤの声にに合わせるように開いた世界樹の扉ーー半年前に突入した物ーーをくぐる。中は完全に改修され、ユグドラシルシティへと向かうエレベーターが円形の壁にズラリと並んでいた。中央にはテーブルとイスもあり、さながらカフェチェーンのホールの用だ。
「僕もよく知らないんですよね。最近、少し大がかりな事件を解決してバタバタしていたんです。」
「俺も同じく。」
「あぁ、じゃあ確認してるの俺だけなのか。」
　納得がいったようにジライヤが頷き、俺達の乗ったエレベータが上に上がるのを確認して続ける。
「〝アレ〟の後、ＡＬＯの運営会社が変わったんだ、そん時にデータをまるっと全部貰ったんだと。で、そん中にな、〝そいつ〟があったんだ」
「そいつ？」
　エレベータを降りながらスクナさんが聞き返す。
「あぁ、かやばあきひこ、だったか？アイツの作った世界だよ」

リンゴーン・・・リンゴーン・・・
その瞬間、不意に鐘の音が鳴る。それに合わせるようにジライヤが空を・・・月を見上げ、つられて俺達も月を見る。その一部が欠け始めていた
「サイトに載ってたのは今日の日付とこの時間。月を背にそいつが現れるって予告だ。そのオフ会も、これに合わせて日程決めたんだろうな。」
月を欠けさせたのは、三角形の影を映す何かだった。影を大きくしながら近づくそれは、よく見れば円錐型の巨大な建造物に見える。
「なんだあれ・・・城みてぇだな」
「城・・・もしかしてあれは！」
ミカヅチの呟きで、スクナさんと俺は〝ソレ〟を想起した。スクナさんが思わず零した声を引き継ぎ〝ソレ〟を告げる。
「〝浮遊城〟アインクラッド・・・」
「大正解、ＡＬＯ最新のエンドコンテンツ。ＳＡＯの再現エリアだと。」
ジライヤがその声と共に宙に舞う。それを目で追うと、その後ろにいくつもの流星が空に上がっていくのが見えた。
「早くいかねーと乗り遅れちまうな、早くいこーぜ。」
「あ、ちょ、待ってくださいっすジライヤ先輩！」
同じように流星にならんと飛ぶシルフとノームを目で追い、そのまま流れで隣にいる探偵へ目線を向けると。同じような動きをしたのであろう探偵と目が合った。思わず笑いあうと、その手で俺の手を取り浮かび上がる。
「それじゃあ僕たちも行きましょうか、〝カラカサ〟君」
「そうですね、スクナさん」
その声にこたえて翅を震わせ、浮遊城へと飛び始めた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
タイトル：結城明日奈氏の昏睡原因解明および〝ＡＬＯ〟意識的集団監禁事件
記述：灰原彩